

明治末期『上毛新聞』にみる私的売春イメージ ——自然主義、出歯亀、出歯る人々——

眞杉 侑里*

はじめに

近代日本における売春の問題を見たとき、国家が売春営業者（特定の場所での貸座敷・娼妓）を公認する近代公娼制度からいち早く抜け出した群馬県の事例は、長らく廃娼県の先駆として公娼制度廃止運動の旗印となっていた。この群馬県では1894（明治27）年の公娼制度廃止以降、1912（大正元）年8月に「料理店飲食店及芸妓取締内規」¹⁾によって私的売春を序列化・公認するまで、売春を全面禁止としていた。しかしながら、この売春禁止は形骸化しており、群馬県警察部はのちにこの時期を次のように総括している。

廢娼後ノ当分ハ廢娼論者ノ言フ如ク密娼少ク成績良好ナリシモ年月ヲ経過スルト共ニ存娼論者ノ言フ如ク自然ノ趨勢トシテ漸次密娼跋扈セルモノ、如シ其ノ後明治三十一年並明治四十年ニ再ヒ公娼設置説抬頭ヲ見タルモ反対運動ノ為実現スルニ到ラサリシカ而モ私娼ハ益々増加シ明治四十一年ニ至リ自然ノ必要ヨリ従来嚴重ニ取締リタル私娼ノ取締ヲ却テ寛大ニシ濫、一般警察ヲシテ彼等ノ營業所ニ臨檢セシメサル方針ヲ取りタル為メ益々私娼（酌婦）跋扈ヲ来シ蕎麦屋飲食店等彼等ノ巢窟ハ所々ニ散在増加スルニ至レリ²⁾

ここで指摘されているような売春の状況は新聞紙面でも散見され、公娼制

* 立命館大学大学院文学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員 DC

度の重しが取られたことにより、従来かくれていた私的売春が前面化していたことが窺われる。そうであるにも関わらず、近代売春研究ではこうした群馬県の状態に言及しているものは少ない³⁾。それはこれまでの売春研究が公娼制度にのみ特化するあまり、そこからこぼれ落ちた私的売春にまで研究が及ばないという研究動向全体の問題でもあった。そこで、筆者は私的売春に着目し、それがどのように行われてきたのか実証的検討を行ってきた⁴⁾。その過程で、当該期の私的売春が芸妓、飲食店に所属する酌婦により担われており、彼女らと客が直接交渉を行うことにより売春営業が成立していたということを明らかにした。

こうした私的売春の営業は、警察部総括によれば1908（明治41）年に至りますます増加の傾向をみせ、私娼（酌婦）跋扈の状況を来していたという。この指摘については具体的な検討を要する部分もあるが、少なくとも1912年内規を準備させるような動向を1908年において観測している点は興味深い。もし私娼に対する取締りの軟化があったとしても、こうした私娼の激増はそれだけを理由として発生したとは考え難く、私娼の跋扈という現象が観測されたのであれば、それは私的売春に対する需要が存在してこそ成り立つものである。その意味で、群馬県の私的売春を検討する以上、こうした営業に対する人々の需要—それに何を期待するのか—という点を置き去りにしたまま論を進めることは出来ない。

こうした私的売春に対する人々の認識を検討するうえで、おそらく一つのキーワードとなるのが、奇しくも1908年頃から新聞紙面に頻繁に登場し、私娼とも関連して語られる「自然主義・出歯亀・出歯る」の用語である。これらの用語の特徴は、文学運動・具体的事件といった出発点を離れて流布していくところであり、こうしたひとり歩きの過程で様々な状況・思考を受け入れていく。詳細は本論にゆずるが、これらが私的売春と関連して語られたことは極めて重要であり、これを分析することによって私的売春に対する人々の認識—ひいては社会的動向に言及することが可能であると考えられる。

以上の観点から、本稿では自然主義・出歯亀・出歯るの用語を検討の軸として、それがいかに使用され、どのような意味を持っていたのかを分析する。この際の主要史料としては、当該期における私的売春の様相を伝えていた情報媒体のうち紙面の残存状況のよい『上毛新聞』を用いた。なお、『上毛新聞』がマイクロフィルム化されているのは1910(明治43)年9月以降で、それ以前の部分については個人の家文書群から『上毛新聞』を搜索し、複製史料を収集している。とくに本稿で使用した史料の詳細(文書名、所蔵、請求番号)については以下に示す。

- ・ 櫛渕達男家文書(群馬県立文書館蔵、請求番号:74-1-1(25~69))
- ・ 上毛新聞マイクロフィルム(群馬県立文書館蔵、請求番号:FD9005(1~5))

なお、本稿で引用、注釈する際の表記については、主要史料とした『上毛新聞』から引用した場合については、記事見出し、掲載日、掲載面のみを記載し、新聞紙、文書群名を省略している(末尾の表を含む)。また、当該期の紙面には個人を特定しうる情報(氏名、住所地、本籍地など)が掲載されているため、明らかに芸名であると分かる場合以外については〔某〕などと置き換えた。くわえて、旧字、変体仮名については基本的に現行のものに直している。

第1章 自然主義・出歯亀・出歯るの概要

1. 自然主義、出歯亀の概要

本稿の分析のキーワードとなる自然主義、出歯亀、出歯るという用語は如何なるものであろうか。これらの単語はそれぞれ違う来歴を持ちながら、次第に一群の単語として理解されるようになるもので、その変遷の中で様々な意味を付加されていく。そこでまずは、私的売春イメージの手がかりとなるこれらの語が如何にして成り立っているのかという点を、先行研究⁵⁾を引き

ながら見ていきたい。

これらの語は基本的に「わいせつ」に関する比喩表現のように使用されているが、そもそもは文学運動である「自然主義」から出発したものである。1908（明治41）年2月に小栗風葉『恋ざめ』、生田葵山『都会』の両小説が風俗壊乱にあたりと発禁処分となり、同年3月に文学士森田草平と平塚明子が心中未遂事件を起こしている。光石亜由美氏は、こうした動向により「性欲や肉欲を告白するという自然主義のイメージに、青年子女を性的な行動へと駆りたてる危険な思想というイメージがつけ加えられた。森田草平は夏目漱石の弟子で、自然主義文学者ではないのだが、彼らの心中は『自然主義文学士と禅学令嬢』の情事として話題となる」⁶⁾と指摘している。

こうした傾向は、同年3月22日に発生した事件によって新たな局面を迎える。それが東京大久保にて発生した通称「出歯亀事件」である。これは銭湯帰りの女性が強姦の末に殺害された事件で、銭湯をのぞき、女性を尾行し、強姦・殺害した犯人であるとされた男性のあだ名から「出歯亀」の事件名がつけられている。斎藤光氏は自然主義という用語が「文学から『性』へと、その指す範囲を広げていく中で、『自然主義』は『色魔』とも結びつく可能性を持って来た」⁷⁾との指摘を行っており、それ故に色魔という結節点により「出歯亀」と自然主義が結びつくのは容易であったと分析している。この両者が結合されたことにより、本稿で扱うような「わいせつ」を意味する一群の用語が形成されたのである。

ただし、それは「わいせつである」という漠然とした意味だけではなく、具体的な意味をも表すものであった。特に実際の事件にその起点がある「出歯亀」ではその傾向は顕著で、斎藤氏によると「『窃視者』『手淫者』『追跡者』『強姦者』『殺人者』、そして、『色情狂者』としての『出歯亀』」⁸⁾が存在している。またこれから派生して「出歯亀」の動詞形である「出歯る」という用語も登場しているが、これは意味の上でも出歯亀をひいており上記意味分類が動詞形になったもので構成されている。また永井良和氏は、出歯亀の

「主体は男性に限らず、男性に言い寄る女性や、男湯を覗く女性にも用いられている」⁹⁾との指摘を行っている。

これらの一群の用語は、その形成過程において元となった単語に少しずつ様々な意味合いが投入され、そうして蓄積された意味の言葉を代替するように使用されてきた。そのため、各文章の中でそれらの語が何に代わるものであるのかについては、わいせつであるという点を紐帯とした具体的・抽象的な意味内容の中からいずれが選択されているのか、その都度検討しなければならない。しかし、そうした運用に関する検討については次章に回し、ここではまず、こうした傾向が『上毛新聞』にも適応し得るものであるかという点を確認したい。『上毛新聞』1908（明治41）年7月29日の記事「鬘斗買の恋」に次のような記述がある。

〔男〕とはふは日露戦役に出征して一時金を下賜されたる軍人上りの男なるがその一時金にて鬘斗絲買を始めたれどこの男自然主義にかけては元祖出歯亀をも凌ぐほど、て日々儲けた金は悉く女に入揚げ忽ち元の木阿弥とはなり¹⁰⁾

この男は、鬘斗絲買いを生業としているのであるが、その稼ぎをすべて女につき込んでしまう、好色な人物であるとされている。ここではそうした男の性質が「自然主義にかけては元祖出歯亀をも凌ぐ」と表現されており、元祖出歯亀が自然主義的人物だとみられていることが分かる。ここから、『上毛新聞』においても自然主義と出歯亀の結合が確認でき、両者が一群の用語であると判断できる。

2. 自然主義、出歯亀の紙面上への登場

では、自然主義、出歯亀、出歯るの一群の用語が新聞紙上で用いられるようになったのはいつからであろうか。まずは、その点について見ていきたい。

図「自然主義」「出歯亀」出現数（月別件数）は、本稿の対象史料である『上毛新聞』における各単語の登場する記事数を集計、グラフ化したものである（折れ線部分）。それに加え、参考として大手新聞である『東京朝日新聞』、『読売新聞』での登場回数をそこに重ねた（縦棒部分）¹¹⁾。なお、単語がどう活用されているのかを知ることを目的としているため、それらの大本である文学上の自然主義、大久保で起きた元祖出歯亀事件については収集対象からはずした¹²⁾。加えて出歯亀の動詞形である「出歯る」については、出歯亀の変化形であるという点を重視して「出歯亀」数の中に加えて集計した。

『東京朝日新聞』について見てみると、自然主義は1908年3月25日に森田草平、平塚明子の心中未遂を報じた記事の見出しに「自然主義の高潮▽紳士淑女の情死未遂▽情夫は文学士、小説家▽情婦は女子大学卒業生」¹³⁾として登場している。この記事を初出として同年8月までは（7月をのぞき）1、2件の記事が見られる。その後は、散発的に1909年5月、1913年4月に1

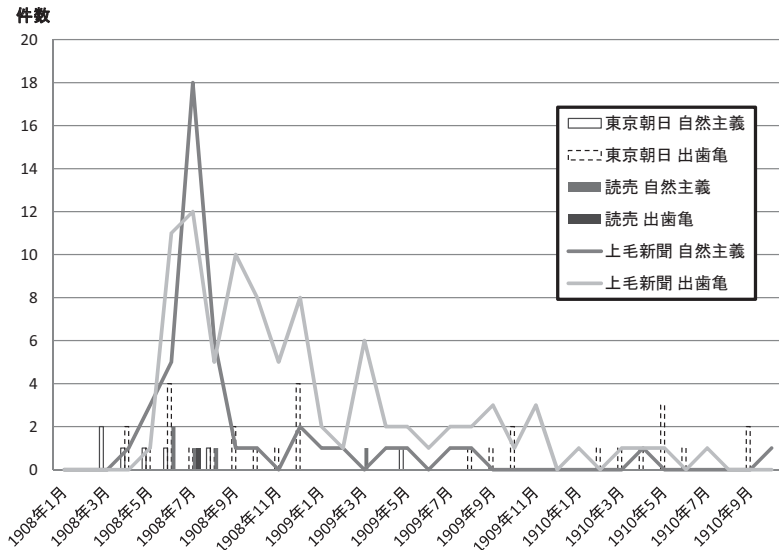


図 「自然主義」「出歯亀」出現数（月別件数）

件ずつの事例が見られる。出歯亀の事例については1908年4月20日に強姦未遂事件の記事にて犯人を「出歯亀の亜流」¹⁴⁾と表す事例が見られるのを皮切りに、1908年12月まで毎月登場する。その後はしばらく間隔があき、1909年8月から10月、1910年2月から6月、同年9月、1911年3月から7月、同年9月に1～3件の記事が見られる。それ以降は間隔をあけ1912年中に3件、1915年、1916年、1918年中にも1件ずつ確認できる。

『読売新聞』上における自然主義の記事は1908年6月4日「越後の自然主義村(上)」¹⁵⁾という2回連載記事に始まり、同年8月までは毎月登場している。しかし、それ以降は1909年3月に1件みられるのみで、ほぼ姿を消している。対して出歯亀記事については、1908年7月24日に「出歯亀の歌の流行、出歯亀にちなんだ芸妓の呼称の存在を報じた記事(コラム)」¹⁶⁾が1件見られるのみで、ほぼ使用されていない。

以上、大手二紙をみると、自然主義、出歯亀の単語は概ね1908年3月から同年12月頃に集中して登場し、それ以降は散発的に用いられていることが分かる。その記事の内容については男女交際、男女関係の錯綜など性的な奔放さを書いた記事が多く、特定の職業との接近はみられない。出歯亀については、大本の出歯亀事件の内容を踏襲して強姦、強制わいせつに関する記事を中心に用いられている。

では、『上毛新聞』ではこれらの単語はどうなっているのでしょうか。自然主義については、比較的早く1908年4月16日に強制わいせつ事件の犯人を「自然主義の実行者か」¹⁷⁾とする見出しが登場する。以降、同年7月をピークとして1909年8月まで定期的に使用されており、その後、一時姿を消すが1910年4月及び10月に再登場している。出歯亀については1908年5月18日に「女按摩強姦さる 高崎の出歯亀は何者」¹⁸⁾との見出しとして登場。それ以後は1909年11月までは毎月登場しており、同年12月にはいったん姿を消すが、1件ずつながらも1910年7月まではしばしば用いられている。

こうした『上毛新聞』での自然主義、出歯亀の登場状況と他紙を比較してまず顕著な点は、その件数の多さにある。これらの単語が最も集中的に登場していた1908年中頃においても月間最多出現数が一桁である二紙に比べ、『上毛新聞』においては自然主義18件、出歯亀12件とピークが高く、出歯亀については以降も高い位置で推移している。自然主義についてはピーク以降の登場回数は低調であるが、以後も定期的に登場している点是他紙にはないものである。その点で、これらの単語が『上毛新聞』においては比較的長期間にわたって使用されていたことも特筆すべき点として指摘できる。

第2章 自然主義、出歯亀、出歯る一記事の傾向と具体的用法

前章にて見てきた自然主義、出歯亀といった単語は、『上毛新聞』ではどのような記事において、どのように使用されているのであろうか。紙面上では自然主義の用例は47件、出歯亀の用例は60件、出歯亀の動詞形である出歯るについては38件が確認され、のべ145件¹⁹⁾が収集されている(詳細については本稿末尾に付した表自然主義・出歯亀・出歯る『上毛新聞』用例集参照)。これらの用語は先述の通り抽象的から具体的まで様々な言葉の比喩的表現として使用されており、単語のみを見るだけではそれが何を表しているか判断できない。本章では、それらが示す抽象的傾向を把握するため、用語がどのような記事において登場するのかという点を考察し、その中での私的売春の位置を確定したい。その上で用語が私的売春に関する記事でいかに使用されているのかという点を検討していく。

1. 自然主義、出歯亀、出歯る一登場記事の傾向

まずは、自然主義、出歯亀といった用語がどのような記事において使用されているのかという点であるが、『上毛新聞』紙面上の記事についてはその内容により概ね以下の8つに分類できる²⁰⁾。

- ①強姦、強制わいせつ事件
- ②便所、風呂など異性に対するのぞき
- ③複数人による男女関係の錯綜に関するもの
- ④1対1の男女交際でありながらも、人格・行動に問題があるもの
- ⑤警察による売春臨検
- ⑥芸妓に関するもの
- ⑦酌婦に関するもの
- ⑧旅一座（俳優）の行動に関するもの

はじめの①強姦、強制わいせつ事件については、明らかに元祖出歯亀事件の影響とみられ、「高崎の出歯亀」など頭に地名を付けて見出しに用いている例が散見される²¹⁾。また落雷により局部を負傷した事件²²⁾についての見出しに用語が用いられているものも、強姦による負傷を連想させることから（無生物ではあるが）おそらくこの範疇に分類できる。強姦、強制わいせつ記事については、盛んに出歯亀の語が用いられるが、1909（明治42）年に入ると徐々に使用されなくなっていく傾向にあり、代わって「獣欲を遂げる」などという表現が用いられる。これは出歯亀とのつながりが強く意識される区分ではあるが、自然主義の語も使用されており、「美人輪姦さる 加害者兩人は検事送り」の本文においては「飲食店に酒食し居りて之れ（被害女性—筆者註）を認め自然主義の本領を發揮して鳥渡休んで行けと呼留め無理無体に引入れて此辺で稼いだらよかろうと戯れ果は隙を窺つて出歯らんとする気色見えたるより」²³⁾と、自然主義、出歯の用語も確認される。

また、元祖出歯亀事件を強く想起させるものとしては②異性に対するのぞき行為があげられる。①の強姦、強制わいせつについては自然主義、出歯亀、出歯のすべての用語が確認できたが、②については出歯亀しか確認できない。加えて、その記事の登場も比較的小さく、管見の限り1909年1月24日5面の「軍服を著けし出歯亀 酔に乗じて此くの始末」²⁴⁾の記事が初出であり、勘違いであった1件を除きいずれも男性によるのぞきとなっている。

③の複数人による男女関係の錯綜については、既婚者が異性に手をだし問題になる記事²⁵⁾や未婚ながら複数の異性に手を出し問題となる記事²⁶⁾が見られる。これらの記事では複数の関係が発覚したため刃傷沙汰、喧嘩などの騒動がおこり紙面にとりあげられるものが多い。対して④の男女交際は、1対1ではあるが相手が妊娠するも逃走する記事²⁷⁾、教育者が生徒、同僚に手を出す記事²⁸⁾などその行動、人格に問題をみるものである。これについては亡夫を思い剃髪をした女性が「夫の事も何時しか忘れ果て、恋風魔風の横溢せる新作もの、自然主義小説に浮身を糞す有様となり果てたるぞ浅間しく小説の感化は恐ろしき」²⁹⁾との記事が見られ、こうした問題行動の原因に自然主義小説の感化が挙げられている点は興味深い。なお、③、④いずれの場合についても自然主義、出歯亀、出歯るのすべての用語の使用が確認される。

さらには、具体的な違法行為を報ずる⑤警察による売春臨検の記事においても、自然主義、出歯亀、出歯るのいずれの用語も使用されている。これは、当該期に群馬県では全面禁止となっていた売春の現場に警察官が立ち入るといふ記事で、売春を行っているものとして芸妓、酌婦が確認できる。この芸妓、酌婦については、その行動や営業が興味を引くものであったのか、他愛ない日常の様子や客席での珍事、人柄などが個別記事、花柳記事で取り上げられており、定期的に紙面に掲載されている。なお、こうした記事の中にも自然主義、出歯亀、出歯るの用語が頻出しており、これがそれぞれ⑥芸妓に関するもの、⑦酌婦に関するものにあたる。ここでは、先述の通り芸妓、酌婦の動向を中心にそこに通う客の様子も描かれている。

同じく職業に関するものでは、⑧旅一座（俳優）に関するものがあげられる。旅一座の公演が長期にわたるにつけ「同座附近に懇意となりし者多く之れが為め自然主義の寡婦や旅人宿の女中連が俳優連の口車に乗せられて出歯るもの多く（中略）不品行の限りを演じつゝある者もある」³⁰⁾という状況が指摘される。またこうした客の中には芸妓も含まれるようで、俳優が馴染

みの芸妓を恐喝する事件などもみられた³¹⁾。これらの記事の内容は③男女関係の錯綜、④男女交際と似通ったものであるが、俳優という職業のまわりに女性が群がるという構図から職業的な特質が見られない③、④の区分とは分けている。

以上から記事内容の傾向を概観すると、個別事件の集合である①～⑤にはひとつの傾向を見て取ることができる。ここで扱われているのは一方的な性的衝動による行動（①、②）であり、あるいは双方向の関係性であったとしても行動に問題が認められる出来事である（③、④、⑤）。例え男女の両者が合意している場合であっても、それが複数人にわたった場合には当然問題となるし、立場に不釣り合いな行動や無責任な行動をとればやはり問題となって事件として取り上げられる。つまり、いずれの場合でも「男女の性的接触」に還元されるような話題——一方、双方向を問わず性的に奔放、好色である人物の問題行動が記事の主題であると理解できる。

そして、それらと並んで芸妓—⑥、酌婦—⑦や俳優—⑧といった職業に関する記事が存在している。複数の女性を虜にする俳優や、売春により検挙される芸妓、酌婦の職業もまた、①～⑤と同一の文脈上に存在しており、ここでも性的な奔放さ、好色さが用語の使用と結びついていると考えられる。ただし、私娼（芸妓・酌婦）に関するものと分類されるものは、自然主義の用例46件中23件、出歯亀の用例60件中27件、出歯るの用例38件中17件を占めている点には留意したい。これに⑤売春臨検の記事を加えると、用例の半数近くが私的売春営業に関する記事となっており、自然主義、出歯亀、出歯るといった用語と私的売春が『上毛新聞』上でいかに深く結びついていたかがわかる。

おそらくこうした記事の偏重が、自然主義、出歯亀、出歯るの用語が他紙に比して長く、多く使用されたことに関係していると考えられる。他紙でも扱われている①～④の事件が偶発的なものであるのに対し、⑥芸妓・⑦酌婦の営業は恒常的なものであり当然、取り上げられる頻度も高い。取りも直さ

ず、個人の性的な奔放さ、好色さに端を発したこれらの用語が私的売春と不可分の用語となっているのである。

2. 芸妓・酌婦に関する記事における具体的用例

では、私的売春（芸妓、酌婦）に関する記事の中において、自然主義、出歯亀、出歯るは、具体的にはどのように使用されているのであろうか。まずあげられるのは、前節でみた記事の傾向を直截にあらわす用法—それらが性的なものを匂わす営業であるという示唆である。例えば芸妓については、「姉妹芸者（中略）両姐は心は堅く気は優しく芸は売れども操は売らぬ貞女賢婦人の垂流だとは自然主義人流行の沼田には珍しい白拍子だ」³²⁾として「自然主義人」と対極なものとして芸は売れども操は売らないという芸妓が珍しい存在としておかれている。あるいは「三ヶ町あひ―傘」では次のような芸妓の客席での様子が見られる。

アラヨクツテと甘へた声で客の膝へ半身を持たせ秋波流眇に思ひ内にあれば色気が外にほのめいて障らば落ちんと云ふべき当世出歯式表情術を行ひて先づは相当の玉を売つて居る〔寄留宿〕の小花（一六）は綽名を出歯花と云はる³³⁾

これは、客にしな垂れかかり甘えたような態度で相当の売り上げを上げている芸妓の記事である。その中で、「秋波流眇に思ひ内にあれば色気が外にほのめいて障らば落ちんと云ふべき」様子を「当世出歯式表情術」と表現している。

酌婦についてもこうした用法は見られ、高崎のある飲食店では「四名の酌婦を抱え盛んに自然主義を鼓吹せしめ居たる」³⁴⁾ 営業をおこなっているとの記述が確認できる。ここでは、具体的な営業内容には触れられていないため、しきりと鼓吹させた「自然主義」がいかようなものかは分からないが、同じ

く高崎の酌婦に関する以下の記事が一つの可能性を示唆している。

〔客〕が前記〔飲食店〕に登楼し〔酌婦〕の丸ぼちや顔が案外御意に召したと見へなんとかして自己の意に従がはしめんとしたれど乙女娘の〔酌婦〕は出歯亀流に通用せざる為め〔客〕は〔女将〕に話したれば〔女将〕及び〔店主〕は上客を逃がしては此の不景気に立つ瀬がないと焼芋壱銭を〔酌婦〕に驕り宥めつ騙しつ漸く納得せしめ〔客〕の意に従がはしめたるが其翌日より〔酌婦〕は局部が痒い痛いと言ひ続けしにも拘はらず其後四五人の客を取らせれば（略）³⁵⁾

この記事では、酌婦が出歯亀流に通じないため女将・店主が丸め込んで客の意に従わせており、そのため局部を負傷している。そこから、ここで言う「客の意」とは具体的には性行為を指すと考えられ、出歯亀流とは性的な営業手法であると理解できるのである。使用されている語は「出歯亀流」と「自然主義」と異なっているが、両者とも客を呼ぶための方法として記述されており、出歯亀流の内容を見る限りそれらは性的接触を志向する語として使用されていると類推される。そして、こうした芸妓・酌婦の営業の結果として立ち現れるのが、分類⑤にみられる売春であった。

以上でみられた、営業内容を比喩的に表現する「出歯亀」「自然主義」の用語は、他の単語に性的であるという方向性を与えるようにも使用されており、芸妓ついて以下のような用例が見られる。

近来は箒客と出歯芸者とが増加した結果花柳界には客の奪略競争が始まつて故に意^マ久^マ気のない手腕のない連中は忽ち客を横取りされるとの話である³⁶⁾

ここで「出歯芸者」と対置されている「箒客」とは、「箒屋さん」などと

も呼ばれるもので、「特定の芸者を決めずに、芸者なら誰彼の見さかきもなく次々と代え、枕の席を共にしたがる客」³⁷⁾を言う。つまりこの「箒客」と「出歯芸者」は、そのまま需要と供給の關係に比定でき、「出歯」が冠されることによって好色な客を対象とする芸妓であるという示唆がおこなわれているのである。同種の呼称としては、「自然主義芸者」との用例もみられるが、これも

江戸から新妓を抱えて来たところが芸と云つたら御座附が一つ満足に弾けぬのでイクラ自然主義芸者にしても御座附と三下りサノサぐらゐは出来なければ玉代の手前もあるだらうと目下玉榮とやつ子が毎日稽古をして居る³⁸⁾

というように使用されており、「自然主義」を冠することによって芸を売りとしない一性的な接触を売りとする芸妓であるという意味を加えている。それがさらに露骨になると「〔寄留宿〕では娼業拡張とあつて吾嬢の裏の新築二階家へ近々転宅し更に出歯黨員数名を抱へるさうだ」³⁹⁾と、芸妓(芸者)の語がとれた状態で使用されるようになる。

こうした「自然主義」「出歯亀」にある種の間人を象徴させる用例は、彼女たちが行う営業を期待してくる客にも適応されており、「〔芸妓になったとはいえ一筆者註〕苟くも旗元のお嬢様ともあらうものが自然主義の亡者や出歯亀の子分に酒の酌をし袖袂の一寸も引かせるとは残念千万」⁴⁰⁾というように、芸妓に群がる客が「自然主義の亡者」「出歯亀の子分」と表現されている。つまり、出歯(亀)、自然主義の語は、漠然とした意味では芸妓・酌婦の行っている性的な営業手法を示唆し、そうした営業を供給する側(私娼)や、需要する側(客)をも表す用語として使用されているのである。

自然主義、出歯亀といった語が芸妓・酌婦の行う営業方法の傾向を漠然と示唆するものである一方、これらの語はある程度まで具体的行動とも置換さ

れるものとなっている。例えば、飲食店・料理屋へ登楼した客の行動を指し、次のような記述がみられる。

〔寄留宿〕の小梅と酉子とは一兩日前の夜〔料理店〕へ聘ばれ或るお客に自然主義を迫られたので急に狂言の腹痛を起し痛くもない腹を揉むやらさするやら叩くやらの大騒ぎをしたので流石のお客も呆然として逃げ去つたとか⁴¹⁾

この時期の芸妓・酌婦による私的売春については、店にあがるのが性行為の実行とは繋がっておらず、性行為を行うためには客が直接、芸妓・酌婦と交渉する必要があった⁴²⁾。そのため、この記事にみられる行動はおそらく客が芸妓に対して売春交渉を行っている部分であると推測され、そこから「自然主義を迫る」という言い回しが「性行為を要求する」の言い換えであることがわかる。また、この売春交渉については出歯亀の動詞形である「出歯」を用いて次のように表現されることもある。

飲食店〔某〕方へ押上り酌婦〔某〕を捉へて出歯らんとしたるも同人が承諾せぬとて乱暴を始めさんへ擲付たる上杯を打付け微傷を負はせたる騒ぎに本町派出所より大山巡査出張して取調べの上本署へ引致さる⁴³⁾

ここにおいては、酌婦との売春交渉の様子が描かれているのであるが、上記の2例はいずれも交渉決裂の事例である。もし、交渉が成立した場合には性行為にすすむのであるが、この際にも自然主義、出歯亀の用語が用いられる。「酌婦〔某〕は一昨夜十一時四十分来客より聊かの祝儀を貰ひ自然主義の実行中を臨検の木村刑事に認められ拘留五日」⁴⁴⁾という記述では、「自然主義の実行中」という語が見られる。この記事については、ご祝儀を支払っ

ている点、処罰を受けている点⁴⁵⁾から、これが金銭の授受を伴う違法行為であることがわかる。それに酌婦の営業手法を勘案すると、この「自然主義の実行中」は「性行為(売春)」に代わる語であると推測される。また「酌婦〔某〕を附馬にして出でたるが道すがら兩人は如何なる契約出来しものか(中略)同夜宿錢とも金一円を貰ふ約束にて出齒らせたる旨自白したれば拘留五日」⁴⁶⁾との記事でも金銭の授受、処罰の記載から売春と推定することができるが、売春にあたる部分が「出齒らせた」と読み替えられている。

ここに出てくる出齒亀の動詞形である「出齒る」は「○○で出齒る」「○○に出齒る」「○○へ出齒る」といった表現が確認されている。この冒頭部分(○○)に場所、店舗名が入れられて、「青柳の糸其儘の小光姐さんはツイ二三日前の十二時頃舞台横丁の〔料理店カ〕で出齒ったまではよかつたがお約束の娯祝儀が少ないとかなんとかで欲が手伝ふ痴話狂ひの果て往来に飛び出し」⁴⁷⁾といったように使用される。売春と確定できる事例とは異なり前後の文脈からの確定は難しいが、少なくともこの記述においては、料理店でご祝儀をもらうという部分からそこで営業が行われていることは確認できる。ただし、この部分で最も重要であるのは、その「出齒る」の主語が芸妓の側であるという点である。つまり、出齒亀の動詞形である「出齒る」は、「売春を迫る客」と「客をとる芸妓」の両者の行動に代えう得るものであった。

なお、この出齒るには次のような用例もみられる。

菊龍は一昨日の一番列車時間に停車場へ出齒り折柄下車して来た田紳と車を連ねて南町の〔料理店〕へ乗り込み一日一晚の大騒ぎをやらしかたが益々以て油断も隙もないエラ物だと確定した⁴⁸⁾

この記事では、芸妓が停車場で客と落ち合っており「停車場へ出齒り」の部分は彼女ひとりの行動であることが分かる。そのため、この「出齒る」は

売春や性的営業に直接的に代わるものであるとは判断しづらい。こうした用例はこれだけではなく、「素見連の休憩所兼お茶挽芸妓の出歯り所なる〔飲食店〕」⁴⁹⁾との記述も見られる。この「お茶挽芸妓」は客がつかず実質上休業となった芸妓であるから、ここにおいても「出歯る」のは芸妓ひとりであり、記述通りに行動をなぞるのであれば、その意味は「出掛ける、出張する」が最も近いように見える。つまり、「出歯る」には性的なニュアンスと同時に「出掛ける」とのニュアンスが込められていると考えられる。先述の通り、売春が店を通さない私娼との直接交渉で成り立っていたことから、実際の性行為を別の場所で行うことも可能であり、売春用例の「出歯る」に出掛けるというニュアンスが含まれるのであれば、実際の営業にかなり忠実な用語が使用されていると考えられる。

以上の検討から、自然主義、出歯亀、出歯るの語は芸妓・酌婦に関する記事の中で、その営業方法やそれに魅力を感じる客を示唆する役割から具体的な行動の代替語まで、私的売春営業に密接に関連して使用されている。そして、それらの用語は私娼とその客の双方の性質、行動として用いられるものでもあった。

第3章 行為主体の問題とイメージ

さて、前章において『上毛新聞』における自然主義、出歯亀、出歯るが使用される記事の傾向、記事群における私的売春の位置・具体的用例についてみてきた。そこからこれらの用語が性的なニュアンスを抽象的・具体的に表現するものであったことが明らかになったのであるが、これらが私的売春と強く結びついていることをどう考えるべきであろうか。ただ両者を結びつけたのは売春=わいせつ行為という意味だけであると理解してしまってもよいのであろうか。それらの用語が、一定の方向を示しつつも様々な要素を取り込んでいく語であるとすれば、そこには何がしかのイメージが展開されてい

ると考えられる。

それを読み解くための鍵となるのが、この用語の主語・主体となっているのは誰か、という点である。自然主義、出歯亀、出歯るの用法を具体的に検討してきた結果、私的売春については、いずれの用語も私娼、客の双方の行動・態度となり得るものである点が明らかになっている。出歯亀が強姦事件の犯人（男性）の呼称でありながら、性的人物というイメージを紐帯として女性にも適応された点は先行研究でも述べられる部分であるが、『上毛新聞』においては動詞形である「出歯る」についても男女双方に用いられている点は重要である⁵⁰⁾。すなわち、私的売春においてその供給者と需要者は双方とも行動の主体として捉えられていたとみることができるのである。

では、そうした主体同士の関係はいかに見られていたのであろうか。私的売春を主題としたものではないが、非常に興味深い記事がある。

〔男は〕十五歳の時本県庁の給仕を勤め居たるが恋愛小説或は自然主義の小説を耽読したる結果は惧るべし肉欲上の快樂を覚へ榎町通の下等飲食店へ出入して怪し気な女を買ひたるが抑もの始めにて僅許の給料にてはとても遊ぶ訳には行かず⁵¹⁾

これは学生風の男が情婦と同居しているという記事の男の来歴について記した部分で、引用中に現れている「下等飲食店」とは酌婦を置く飲食店を指す。この記事によると、男は恋愛小説や自然主義小説を耽読するうちにそれらに感化され、酌婦の下に通うようになったと述べられている。つまり、ここにおいて「恋愛・自然主義小説」と「酌婦を置く飲食店へ通う」ことが等式で結ばれており、恋愛行動を実現するために私娼通いが選択されているのである。こうした選択には、おそらく先ほど確認した私的売春の「主体」の問題が関係していると思われる。芸妓・酌婦による私的売春は、客が彼女らと相対交渉一口説くことにより成立しており、記事でも確認した通り

断られる場合もある。そうした売春のあり方は両者がある種の対等関係にしておき、芸妓と客の双方が「出歯る」の主語となり得たことも、ここに起因していると考えられる。つまり、私的売春は男女の両者が主体として振る舞う「恋愛」と結びつけられ理解されているのである。

ただし、ここで言う「恋愛」については如何ほどのものであるのか、留保が必要である。この点については、次のような指摘がなされている。

『夜と恋愛』此の二字は何処迄も主従関係を持つて居る様だが『夜の共進会と恋愛』となつたらば更に密接な関係がある様に思はれる勿論此処に云ふ『恋愛』なる二字は真面目に解釈すべき程神聖なものでは無い極端に云へば▲野合に近い位なものだと這麼ことを考へながら記者は例に依つて会場内を逍遙いて居た唯逍遙いても詮はない今日は一番最も自然主義の發揮されそふな処を探して見やふ其れには余興街に限ると其の方面を巡つて見たが一組二組の男女に出遭つた許りで大した獲物は無い⁵²⁾

この記事は、共進会々場⁵³⁾での男女の様子を主題としたもので、男女の潜みそうな場所を「自然主義の發揮されそふな処」と言い換えており、ここにも「自然主義」の語を見ることができる。その点でこれも自然主義用例の一部なのであるが、最も重要であるのは冒頭で「恋愛」をどう理解すべきか述べている部分である。ここでは、(自然主義が發揮される)男女の様子を見るにあたって「恋愛なる二字は真面目に解釈すべき程神聖なものでは無い極端に云へば▲野合に近い位なものだ」⁵⁴⁾と断じており、恐らく私的売春における「恋愛」もこれに近いものであると想定される。

また、自然主義、出歯亀、出歯るの語は私的売春や私娼に対して揶揄的な響きをもって語られているが、必ずしもそれだけではない。下記は「自然主義の女神現はる 大妻と相助の水泳ぎ」という見出しがつけられた記事であ

る。

明神様へ参詣し各々勝手な熱を吹いた祈願を籠め戻り道に大渡りの船橋へ差蒐りし頃は早や天明に近づきしより一同の者は此処にて御来迎を拜まんと橋の袂に佇み居りしに大妻相助の両妓はお転婆の随一だけに何時の間にか雪をも欺く素肌となり朝靄に包まれて漣寄する汀に降り立ち水を望みて立ちたる姿は時代に云へば天津乙女が軽絹を纏ひし如く今様に云へば自然主義の女神が現はれしに似て(中略)水より上れば我れを忘れて眺め居たる一同も漸く無我の境より出歯式の人間に帰り両妓の姿が清心丹の商標に似て居るの彼の乳房の工合では小児の二人や三人はあつたらうなど、怪しからぬ品評をなし⁵⁵⁾

この記事では人目もはばからず水際で全裸になる芸妓を「時代に云へば天津乙女が軽絹を纏ひし如く今様に云へば自然主義の女神が現はれしに似て」と描写しており、自然主義の女神が天津乙女一天女と同列に扱われている。また、彼女らが水から上がった後に観衆は「我れを忘れて眺め居たる一同も漸く無我の境より出歯式の人間に帰り」、奔放な芸妓の行動が見たものを無我の境地へ誘うものとして描写されている。従来、揶揄的な表現に見える私娼への記述であるが、それは決して決定的な批難を意味するものではない。ここでは「天女」や「無我の境」など無邪気な芸妓の行動にふと惹きつけられる様な表現が選ばれており、そこにはかすかな憧憬を見て取ることができるのではないか。

おわりに一私的売春に対するイメージ

以上、1908(明治41)年頃から新聞紙上に頻出した自然主義、出歯亀、出歯という用語を手掛かりとして、そこに如何なるイメージが描かれていた

のかという点を考察してきた。本稿が私的売春イメージを読み解く手掛かりとして扱ったこれらの用語は、先行研究により「わいせつ、性的である」という要素が色濃いものであるとの指摘が行われている。『上毛新聞』上の用語登場記事を概観した際にもそうした傾向は顕著であり、同紙もまたこうした共通認識を共有するものであると言える。その一方で、『上毛新聞』においては用例の約半数を私的売春を担う芸妓と酌婦に関する記事が占めている点は、比較対象である読売、東京朝日の両紙には見られない傾向であり、『上毛新聞』では私的売春とこれらの用語が密接に結びついていたことが分かる。

では自然主義、出歯亀、出歯るの用語は具体的には、私的売春に関する記事の中でどのように使用されてきたのであろうか。極めて単純なものでは、それが「性的な営業」であるという示唆を与えるものとして利用されており、これは用語に対する共通認識と直接的につながるものである。こうした物事の方向性を示唆する用例は人物にも当てはめられており、性的な営業を行う芸妓、それを期待する客の双方の呼称に「自然主義」「出歯亀」は姿を現す。また、これらの用語はこうした方向性を示唆するような用法以外にも、私的売春に関する具体的な行動を示す用語としても用いられている。例えば私娼と客との売春交渉、性行為の実行、或いは私娼と客が出歩くことまでもが自然主義、出歯るの語に置換されており、これらの用語は極めて私的売春の実態に則した使用のされ方をしてきた。

こうした点を踏まえた上で、きわめて興味深いのはそれらの用語の主語・主体はだれであるかという点である。用語の主語・主体へと目を転じてみると、自然主義・出歯亀的人物は私娼と客の双方であり、また売春を行う「出歯る」も私娼と客の双方を主語としていることが理解できる。つまり、私的売春営業においては客（男）と私娼（女）の双方が行動主体として描写されており、両者の間で行われる売春交渉は主体同士という対等な関係の中で断られたり、合意に至ったりするという関係性に読み替えられる。こうしたや

り取りは私的売春営業の登楼—相對交渉—売春という営業手法⁵⁶⁾に則ったものであったが、そこに客は別の意味を見出している。

自然主義・恋愛小説に感化された男が私娼通いを選んだように、私的売春に投影されていたのは男女両者が主体として振る舞う—婚姻などの規範から離れた「恋愛」のイメージであった。こうした志向は登楼—売春が一体となっている公的売春では対応できないものであり、ここに私的売春を後押しした需要を見ることができる。売春全体を俯瞰してみた時こうした1908年頃の動向は、公娼制度ではもはや負えない要求が私的売春において実現されているものであり、あるいはここに売春に対する要求の変化の画期をみ取取することも可能であろう。

注

- 1) 私的売春営業の拠点となっていた飲食店を、接客に芸妓を用いる甲種料理店、接客に酌婦を用いる乙種料理店、婦女を置かない飲食店の3種に分類するもの。この中の乙種料理店(酌婦)のみで売春営業を黙認するという規定。これにより群馬県独自の半公娼制度が敷かれた。この措置を藤目ゆき氏は公娼制度を名目のみ変更したものであると指摘しており、従来の顕彰的評価に一石を投じている(『近代日本の公娼制度と廢娼運動』(『性の歴史学』不二出版、1999年))。
- 2) 「公娼廃止ヨリ現在ニ至ル状況」(群馬県警察部衛生課主管『自大正一四年至昭和三年会議』、群馬県立文書館蔵、請求番号：大0775_3/4)1丁表。本史料は1927(昭和2)年に警察長官会議に提出される書類として作成されたものの一部である。
- 3) 公娼制度廃止後の群馬県については、藤目ゆき氏が1912年内規に対し制度廃止後も公娼制度的な取締り方法が実施されていたと言及したのみ。売春の禁止時期の実態については、ほとんど検討が行われていなかった。
- 4) 拙稿「明治末期群馬県における私的売春営業の構造」(『次世代人文社会研究』第9号、2013年)。
- 5) 文学作品としての自然主義については、本稿の範疇ではないため省いた。比喩的用語としての自然主義・出歯亀の両者を概観した研究としては、斎藤光氏の「人々の世間的気分・出歯亀前夜」(『京都精華大学紀要』第14号、1998年)が詳しい。
- 6) 光石亜由美「自然主義」(井上章一&関西性欲研究会『性の用語集』講談社現代新書、2004年)251頁。
- 7) 前掲斎藤「人々の世間的気分・出歯亀前夜」71頁。斎藤氏は『萬朝報』に掲載されている記事・狂歌から「自然主義」の変化を検討しており、『都会』発禁事件を境として

文芸評論欄が自然主義小説への評価を全面的否定へと転換させ、それ以降近代的「性規範からの逸脱」をあらわす用語として使用されると分析。この傾向は同時期の狂歌にもみられ、森田・平塚心中事件の時点ですでに自然主義が性的なものを表すものになっていると指摘している。

- 8) 斎藤光「出歯亀」(前掲『性の用語集』) 263 頁。
- 9) 永井良和『尾行者たちの街角』(世織書房 2000 年) 29 頁。
- 10) 「鬘斗買の恋」(1908 年 7 月 29 日) 3 面。
- 11) 『東京朝日新聞』、『読売新聞』中の自然主義、出歯亀の登場記事の調査については、「朝日新聞縮刷版検索聞蔵Ⅱ」、「ヨミダス歴史館」を用い、「自然主義」「出歯」をキーワードとして記事の抽出を行っている。
- 12) 具体的には以下の場合についてはこの数に含めていない。①文芸欄、小説紹介など自然主義小説を指すもの。②社会主義などとともに取締対象として記事、論説に登場するもの。③東京大久保で発生した婦女強姦致死事件(元祖出歯亀事件)に関する事件報道及び裁判に関する記事。また、同一記事内に「自然主義」「出歯亀」の用語が両方出ている場合には、両方の登場回数に計算し、同一記事内に複数回同じ用語が登場する場合については 1 件としてカウントした。なお、連載記事の場合は、一連の記事であることを重視して、何回連載であろうと 1 件と数えた。
- 13) 「自然主義の高潮▽紳士淑女の情死未遂▽情夫は文学士、小説家▽情婦は女子大学卒業生」(『東京朝日新聞』1908 年 3 月 25 日) 朝刊 6 面。
- 14) 「剣呑々々▽頬々たる小石川の物騒」(『東京朝日新聞』1908 年 4 月 20 日) 朝刊 6 面。
- 15) 「越後の自然主義村(上)」(『読売新聞』1908 年 6 月 4 日) 朝刊 6 面。翌日の朝刊 6 面に「越後の自然主義村(下)」が掲載されている。
- 16) 「見たり聞いたり」(『読売新聞』1908 年 7 月 24 日) 朝刊 3 面。
- 17) 「婦女の尻を追ふ 加害者は蒨蕪屋の倅 自然主義の実行者か」(1908 年 4 月 16 日) 3 面。
- 18) 「女按摩強姦さる 高崎の出歯亀は何者」(1908 年 5 月 18 日) 3 面。
- 19) 同一記事上に複数の用語が登場する場合がみられる。その際には、1 つの記事であったとしても用語ごとに分けて総数を計算した。また、「花柳便」などの複数の話題を扱う形態の記事については、各話題を個別の記事として扱っている。なお、その際にも前述の原則に則り、複数の用語が登場するものは用語ごとに分けて集計した。
- 20) 本稿末尾の表自然主義・出歯亀・出歯『上毛新聞』用例集内の「自然主義」用語関係、分類部分に対応している。なお、表においては、各分類を省略して①強姦、②のぞき、③錯綜、④交際、⑤臨検、⑥芸妓、⑦酌婦、⑧俳優と表記した。
- 21) 前掲「女按摩強姦さる 高崎の出歯亀は何者」。これ以外にも「渋川の出歯亀 白昼に幼女を強姦す」(1908 年 6 月 2 日) 3 面や「桐生町の出歯亀」(1909 年 8 月 19 日) 3 面などの見出しが見られる。
- 22) 「落雷局部を焼く 自然主義の雷神様か」(1908 年 7 月 30 日) 3 面。

- 23) 「美人輪姦さる 加害者兩人は検事送り」(1908年7月28日)3面。
- 24) 記事の男は「日の出湯の前に胸間には勲八と従軍記章とを輝かせ歩兵一等卒の軍服を着けたる男が頻りと女湯を覗き込みて濛々と立昇る白煙の中より現はれ出づる裸体婦人の湯上り姿の艶なるに気も魂も奪はれ顔の造作を崩して眺め居る処へ通り蒐りし前橋署の野俣部長は此奴色情狂かと本署へ引致して取調べ」られたもの。そこから、本記事の表題の出歯亀は、強姦や追跡を含まない窃視者の意味であると判断される。
- 25) 「滑稽自然主義 前橋署の奇観と大繁昌 妊婦二人と其の下手人」(1908年6月26日)3面など。
- 26) 「木魚三人女」(1908年12月27日)5面など。
- 27) 「出歯亀式脹満の始末 大きなお腹をポンポコポン」(1908年6月15日)3面など。
- 28) 「飛んだ校長さん 旅宿に同宿とはきつい事」(1908年8月3日)3面、「自然主義の教師 卒業女生を墮落せしむ」(1908年10月7日～10日)3面など。
- 29) 「髪斬り美人の理想」(1909年7月4日)3面。
- 30) 「兎櫻座俳優の不品行 女中や寡婦を引ツ懸る」(1908年7月29日)3面。
- 31) 「三ヶ町附込帳」(1909年11月26日)3面。
- 32) 「赤北花柳だより」(1908年7月22日)3面。
- 33) 「三ヶ町あひ〜傘」(1908年10月11日)3面。「三ヶ町」は前橋市の「紺屋町、横山町、榎町にして狭斜の巷を称したるもの」(『前橋市案内』前橋市役所発行、1910年、114頁)にあたる。前橋の花柳欄については、たびたびタイトルが変わっており、この記事の際には「三ヶ町あひ〜傘」というタイトルになっている。
- 34) 「達摩に足が生へて逃走 原因は主婦の虐待か」(1908年8月6日)3面。ただし、この記事においては、その営業は不景気のためか客足が悪くうまくいかず、女将が酌婦を虐待する事態となっている。
- 35) 「少女辱に遭ふ 少女局部に負傷す」(1909年11月13日)3面。
- 36) 「高崎花柳便り」(1908年12月16日)5面。
- 37) 藤井宗哲編『花柳風俗語辞典』東京堂出版、1982年、116頁。
- 38) 「高崎花柳便」(1908年7月8日)3面。
- 39) 「高崎花柳便」(1908年8月4日)3面。引用中の冒頭には寄留宿の名前が付されており、そこから寄留宿に抱えられる「出歯黨員」が芸妓であると判断できる。
- 40) 「旗元芸者の廃業騒ぎ 派出所前は野次馬の山」(1908年7月31日)3面。
- 41) 「高崎花柳便」(1908年7月13日)3面。
- 42) 前掲拙稿「明治末期群馬県における私的売春営業の構造」に詳述した。1894(明治27)年に公娼制度が廃止されて以降は基本的には私的売春は禁止されていたが、次第に芸妓・酌婦による売春が前面化。こうした私的売春のあり方は1912(大正元)年8月30日に「料理店、飲食店営業取締内規」が設置され私的売春を「乙種料理店」「酌婦」に限って公認するようになるまで続いた。

- 43) 「出齒客の乱暴」(1908年9月27日)3面。本記事の見出しの「出齒客」については単純に私的売春を期待した客との意味と考えられる。ただし酌婦に断られており、性行為の要求が一方的である点から出齒亀事件の性格を持つ可能性も考慮される。
- 44) 「自然主義のお灸」(1908年7月8日)3面。
- 45) 1888(明治21)年12月に罰則を地方官に委任する布告が廃止されて以降は、私的売春には刑法第4編違警罪第425条10号が適応されている。また1907(明治40)年の刑法改正に伴って1908年9月29日内務省令第16号「警察犯処罰令」による規定が適応されるようになる。各規定によると私的売春者、仲介者、それらを匿ったものは3日以上10日以下の拘留処分又は1円以上1円95銭以下の科料(旧刑法)、30日未満の拘留(警察犯処罰令)に処せられるとされる。
- 46) 「飛んだ家政学会員 酌婦と共に宿屋へ泊る」(1908年10月5日)3面。
- 47) 「赤北花柳だより」(1908年7月7日)3面。
- 48) 「赤石花柳便り」(1908年9月14日)3面。
- 49) 「三ヶ町五月雨傘」(1909年7月1日)3面。
- 50) 出齒亀事件の犯人が男性であったにも関わらず、好色の人物に対する「出齒亀」の呼称については男女両方に使用される点は、先行研究でも指摘されている。ただし、「出齒る」については「新聞の用法をみると、女性に言い寄る、覗く、強姦する、などの意味で使われている」(永井前掲書30頁)と指摘するのみでその性別については言及されていない。
- 51) 「色魔少年の大賊 恋愛小説耽読から」(1911年12月23日)3面。
- 52) 「夜の共進会記(二) 夜間の開場と恋愛」(1910年10月22日)3面。
- 53) 第13回関東区連合共進会。地方の殖産興業を目的として開催され、各種産物の陳列・品評、物産の即売、飲食店、洋楽の演奏、芸妓の演舞、動物園などの興行などが行われた。1910(明治43)年9月17日～11月15日まで前橋市内の3会場で開催。
- 54) 前掲「夜の共進会記(二) 夜間の開場と恋愛」。
- 55) 「自然主義の女神現はる 大妻と相助の水泳ぎ」(1908年8月6日)3面。
- 56) 私的売春が、客と私娼の相対交渉により決定されており、それ故に両者が交渉を行った店舗から離れた場所へ移動することが可能であったのには、店舗規模と営業効率の問題が強く関係していると考えられる。この件については別稿にて詳細な検討を加えたい。

〔付記〕本稿は、平成25～26年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による成果の一部である。

表 自然主義・出歯亀・出歯亀・出歯る『上毛新聞』用例集

【凡例】・「自然主義」用語関係、有無の記号については以下の通り。

○：自然主義 あり/△：出歯亀・出歯る あり/●：文学史上の自然主義 あり/-：用語使用なし

同一記事の中に複数の用語が使用されている場合は、複数の記号を付す。それぞれの用例については各用語別用例を参照。
・強姦事例については、用語の使用を追うために使用なしの事例についても収録。「自然主義」用語にかかわると思われるものについては参考として記載。

・用例部分の引用中に個人を特定しうる情報(人名、住所など)があった場合にはそれを省き、〔某〕などと表記した。

・用例中に筆者が注記をしたものについては丸括弧を用いて(中略)(ママ)などと表記した。

・変体仮名、旧字については基本的に現行のものに直した。

【「自然主義」用例】

年	月	日	基礎情報			記事内容			「自然主義」用語関係		
			面	件名	郡	地域	特記事項	有無	分類	用例	
1908	4	16	3	加害者は菊蔦屋の倅 自然主義の実行者か		前橋	前橋	満市場跡の暗がりから現れた男が婦女の手を握る事件	○	強姦	「婦女の尻を追ふ、加害者は菊蔦屋の倅 自然主義の実行者か」
1908	5	5	3	自然主義者の若居 知つた娘と間違つて戯れる		前橋	前橋	悪意の娘と間違え事におよぼうとする。	○	強姦	「自然主義の拘留処分 未だ若き婦女を捉へて飛んで飛んだ自然主義に及ぼんとする」
1908	5	17	3	三ヶ町芸者の若居 麗首の面々大車輪		前橋	前橋	「自然主義」の語。出物一覽あり。	○	芸妓	「大姐株が先頭にて綺麗首の面々いづれも大車輪にて自然主義の隨喜者をして十二分に唾涎を流させるよし出物は左の通り」
1908	5	31	3	自然主義の按摩撲らる天下の大道にて情婦と渡合ふ	群馬	倉賀野	倉賀野	女按摩の留守中に他の女のもとへと走る男(按摩)。女按摩が激怒、殴打。	○	錯綜	「自然主義の按摩撲らる」
1908	6	16	3	赤北花柳便り	利根	沼田	沼田	「自然主義」を鼓吹する芸妓	○	芸妓	「千代子は自然主義の鼓吹者として有名の者だが昨今何んに感づ、てか意氣頓に消沈し頻りに考ひ込んで斗り居る姐さんの髪の毛でも脱げるかね」
1908	6	17	3	高崎花柳便り		高崎	高崎	達磨屋に観察に出入りする芸妓、不景氣にて特定の芸妓自当てる客ばかり(魔窟は柳川のみでない)。	○	芸妓	「花柳界も此処半月ばかり非常の不印で毎晩香箱兎が半数位出来て呼ぶお客はいづれも名ざしで見舞が多いさうなだ自然主義も皆に柳川町の魔窟のみでない」と見える」
1908	6	20	3	木質宿にアハヤ血の雨 自然主義を実行する女		前橋	前橋	梅毒から失明し放浪した男が、前橋の木質宿にて売春を行う女と夫婦氣取りに。女が他の男を連れ込み刃傷沙汰に。	○△	錯綜	「自然主義を実行する女」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係				
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	6	21	3	美人の行倒れ 出歯亀男運去る	高崎	駆け落ちのものも有り倒れた行き倒れの女性。同情を寄せる男性と姿を消す。	△	その他	「出歯亀男運去る」「気の毒と同情を寄する出歯亀式の男多ク飯屋（ママ）などを持ち来りて与へたる者等もあり旅行者として市役所の厄介にもならず難く自然主義の信者らしき男が来りて何処へか連れ去りしと云ふ」
1908	6	26	3	滑稽自然主義 前橋署の奇麗と大繁昌 妊婦二人と其の下手人	前橋	妻がありながら出稼ぎ先の娘と駆け落ちした男。出稼ぎ先が複雑、前橋署にて妻とも引合されるが娘、妻とも妊娠。	○	錯綜	「滑稽自然主義」「自然主義大流行の昨今此処にも一団の主義者現はれたり」「前橋署にては此の三人（妻、夫、不倫相手（娘）の自然主義に付て目下嚴重に取調中なる」
1908	7	8	3	宿屋の二階で女の声 自然主義の天罰観面	前橋	高崎の宿にて行き会った男女。方々の女から金を巻き上げられるも、女に見つかり喧嘩に。	○	錯綜	「自然主義の天罰観面」「同家に滞在し居りて何時しか画人は自然主義を実行し（男）は（女）の所持金あるを見て無心を吹きかけたに」
1908	7	8	3	高崎花柳便	高崎	「自然主義」芸者でも三下りサノサ位は必要	○	芸妓	「〔寄留宿〕では此程一寸面が痒めるので江戸から新妓を抱えて来たところか云と云つたら御座附が一つ満足り強ぬのでイクラ自然主義芸者にしても御座附と三下りサノサくらゐは出来なければ玉代の手前もあるだらうと目下玉栄とやつ子が毎日稽古をして居るさうな」
1908	7	8	3	自然主義のお灸	前橋	「自然主義」の実行中を臨検にあう	○	臨検	「自然主義のお灸」「飲食店〔某〕方の酌婦〔某〕は一昨夜十一時四十分米客より脚かの祝儀を貰ひ自然主義の実行中を臨検の木村刑事に認められ物留五日のお灸を賜えらるる」
1908	7	9	3	高崎花柳便り	高崎	新妓の紹介。	○	芸妓	「一昨日嘉多町〔寄留宿〕からも嘉年と云ふ自然主義の相を備へた新妓が出現しました」
1908	7	9	3	赤北花柳だより	利根	通りすがりの満商との行為中に臨検にあう芸妓。	○	臨検	「〔寄留宿カ〕の小春と云へば例の菊庵先生との関係で名高い自然主義芸者だが数日前もツイお手近の〔料理店〕とやらで不具不識の満商人に心采を極め込んだ処へ例の無料風が吹き込み」
1908	7	12	3	高崎花柳便り	高崎	新妓紹介。	○	芸妓	「此程柳川町〔寄留宿〕からみよしと云ふ新妓が現はれた（中略）沼田花柳で自然主義を盛んに実行して居りしものとカ」
1908	7	12	3	高崎花柳便り	高崎	新妓紹介。	○	芸妓	「新妓の松助と栄吉とは何れも自然主義の前科者だが一人は馬顔で一人は豚顔だとの評判」
1908	7	12	3	赤北花柳便り	利根	「沼田仕込の自然主義」芸者、住替えた高崎からもどる。	○	芸妓	「高折は高崎三界まで流れ行き沼田仕込の自然主義を減多矢鷹に振りまいた為にお腹が妙を出し出して肩苦しいの帰つて来たと思口叩くものがあつたが實際は脚氣に罹つて足麻も立たぬ仕儀だそうな」

基礎情報			記事内容			「自然主義」用語関係				
年	月	日	面	件名	郡	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	7	13	3	高崎花柳便		高崎	「自然主義」を迫られたの で、腹痛と言って逃れた芸 妓	○	芸妓	「戒るお客に自然主義を迫られたので急に狂言の腹痛を起 し痛くもない腹を揉むやらさするやるやら叩くやらの大騒ぎ をしたので流石のお客も突然として逃げ去つたとか」
1908	7	14	3	高崎花柳便		高崎	自然主義が流行したため か?新妓が増加。	○	芸妓	「近來自然主義が流行して出處亭が多くなつた原因かは如 らねか?当地花柳の如きは雨後の筈の如く新妓が続出し」
1908	7	15	3	教員酌婦を身受けす 学事視察に來て此始末		前橋	山梨より学事視察に來た 教員。自然主義を實行し、 酌婦を落籍。	○	酌婦	「酌婦(某)と自然主義を實行し同人の前借金四十余円を 突いて泥足をはせ」
1908	7	22	3	赤北花柳だより	利根	沼田	芸しから売らない芸妓のは なし。	○	芸妓	「心は堅く氣は優しく芸は売れども操は売らぬ貞女賢婦人 の輩流だとは自然主義人流行の沼田には珍らしい白拍子 だ」
1908	7	28	3	美人輪姦さる 加害者 兩人は檢事送り	利根 群馬	川田 白郷井	飲食店にて工女に声をか けた男が、後をつけ回す。 飲食店に素人女を引つ張 り込む。	○△	強姦	「飲食店に酒食し居りて之れを認め自然主義の本領を發揮 して島渡休んで行くと呼ぶめ無理無理に引入れて此辺で 穢いだらふよかろうと戯れ果は隙を窺つて出處らんとする 氣色見えたるより兩人は薄氣味悪く思ひて同寮を退出し」
1908	7	28	3	高崎花柳便り		高崎	自然主義を強要しようとし た男が芸妓に断られ、暴 れる。	○	芸妓	「講美江を聘び自然主義を振廻し過ぎてすみ江の為に扇子 で頭を叩かれ男の癖に帯で脚足を縛られたを」
1908	7	29	3	兒觀座俳優の不品行 女中や寡婦を引つ懸る		高崎	高崎で公演中の兒觀座の 俳優が近隣の女中、寡婦と なれ合い、その不品行が問 題に。	○△	俳優	「同座附近に懇意となりし者多く之れが為め自然主義の寡 婦や旅人宿の女中連が俳優連の口車に乗せられて出處る もの多く」
1908	7	29	3	販斗買の恋	勢多	南橋	稼ぎをこごとく女につ き込みむ販斗買いの男が村 娘と意気投合。	○△	交際	「この男自然主義にかりけては元相出處亀をも凌ぐほど、て 日々儲けた金は悉く女に入揚げ」
1908	7	30	3	落雷局部を焼く 自然 主義の雷神様か	群馬	国府	落雷による局部の負傷。	○	強姦	「自然主義の雷神様か」
1908	7	31	3	旗元芸者の廃業騒ぎ 派出所前は野次馬の山		前橋	旗本の娘。芸妓稼業にて売 春まがいの事や客への酌 が嫌になり、逃走・自田廃 業を図る。	○△	芸妓	「苟くも旗元のお嬢様ともあらうものや自然主義の亡者や 出處馬の子分に酒の酌をさし袖袂のツツも引かせるとは残 念千万」
1908	7	31	3	孕み女中		前橋	客と関係して料理店を迫 り出された女中が、新たな客 勤め先にも芸妓から客ら を奪取り。妊娠費用を客か らとる。	○△	錯綜	「紺屋町の(料理店)に住み込み居り自然主義の随一出處 り(ママ)屋の旗頭同家の宿六と乳繰り合つて主婦に退出 され」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係				
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	8	3	3	飛んだ校長さん 旅宿に同宿とはきつい事	一 (県内)	部下の女教師に手を出す校長。那教育会の講習会にここつけて沼田の某旅館に泊まり込む。	○	交際	「某小学校の校長を勧むる。〔某〕と云ふ自然主義の者に著なり数年前同郡内の某校長時代部下の〔某〕と云ふ女教員と行せざるなく」「爾来盛んに自然主義の實行に着手したれば」
1908	8	3	3	自然主義者の衝架 請身の悲しさ給理となる	多野	妊娠するも男が相手にせず真任逃れ。女の親が激怒。	○	交際	「長女〔某〕は同村の〔某〕と云ふ青年と自然主義を實行し居りし報ひは觀面七月と云ふ布袋風となるや乃は自然主義者のこと、て〔某男〕は幾は知らんよ」
1908	8	3	3	高崎花柳便	高崎	自然主義にて自前となる芸妓。	○	芸妓	「あつまは女將の仕込みだけに大に自然主義を振廻はし娼婦類が多くなつた結果今度自前となり〔常留宿〕と云ふ娼婦燈をフララ下げた」
1908	8	5	3	東史の名を騙る悪漢？ 眞物の役人ではあるまし	利根	卑税調査係と偽証し芸妓をよび負債を重ねる男。	○	芸妓	「一助とやら云ふ自然主義専門の芸者を坐右に引き付け頼りに大尺風を吹かし」
1908	8	6	3	遠座に足が生へて逃走 原因は主婦の虐待か	高崎	自然主義を推奨するも、不景氣にて酌婦を虐待。逃走される。	○	酌婦	「四名不景氣の爲めか同家へ登陸せしめ居たるが昨日朝露に包まれて連寄する汀に降り立ち水を望み立て立ちたたる姿は時代に云へば天津乙女が睡裙を纏ひし如く今様に云へば自然主義の女神が現はれしに似て」
1908	9	15	3	三人男の行衛不明 柳座大切の幕が開かぬ	前橋	芸妓が夜中の散歩中に水浴び。	○ △	芸妓	「家鴨のやうにお尻を振り立て、演ずる其の姿に閱喜の唾液を流す自然主義の面々が押すなへへの混雜にて木戸も亂るゝ、斗りに押寄する」
1908	10	7	3	自然主義の教師 (一) 卒業女学生を堕落せしむ	一 (県内)	舞台に出演中の芸妓が、客のお呼びがかかつたと出掛け帰らず。舞右が困演できない。	○	交際	「自然主義の教師」「この品性下劣自然主義鼓吹の教員は今を去るごと数年某学校に在りて青春妙齡の女子を一室の下下に集め倫理を講じ道徳を説く身分を以て儼に關に自然主義を吹き込み居たるが」
1908	10	10	3	自然主義の教師 (四) 卒業女学生を堕落せしむ	一 (県内)	元教え子の卒業生に手を出す教師。	○ △	交際	「〔相手〕より絶交状を受取りたる〔教師〕はその決心の堅きに驚きたるもの、自然主義の實行者としては筆頭第一とも云ふべふ男なれば (中略) 良人ある身の〔相手〕に対して面会を求めたり」
1908	12	19	5	赤北花柳だより	利根	沼田で公演中の西野一行の俳優とここそこそこの小料理屋へしげこむ芸妓ら。	○	俳優	「〔寄留宿〕 (寄留宿) 其他の有軼連は珍らしくも此家彼家の小料理屋へ思ひへへの馬の軼を咬え込み自然主義の一幕を演じてけたそう」

基礎情報			記事内容			「自然主義」用語関係			
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	12	27	5	木魚三人女	東佐波	村娘に手を出した男が結婚するも、妊娠した村娘三人に後始末を迫られる。	△	錯綜	「好男子を気取って仕舞の出陣装の本領を赤分に發揮せざるべからずと茲に於てか所謂色飯鬼と愛じ猛烈に自然主義の實行を試み居たる也」
1909	1	27	3	沼田花柳便り	利根	ここに客を連れ込む芸妓がいろいろの噂。	○	芸妓	「甲橋乙亭に啜え込みの自然劇を演じて無性によがつてゐる(ママ)無爪猫が〔寄留箱〕〔寄留箱〕あたりにあつたぞうだ」
1909	2	28	3	喜劇三人旅	伊勢崎前橋	気晴らしに前橋へ芝居見物に行く芸妓2名と客。	○△	芸妓	「此両人は現世向自然主義や出陣式を■返チャンと心得て居る者なれば」
1909	3	5	3	二代目文学芸妓	前橋	文字に通じる芸妓。芸妓の現状(質の低下)を憂いて教員から芸妓に。神奈川県足柄にて稼業するも客と勘合は既所得労働者、洋妾と勘違いされ任替え。	●	芸妓	「福松と云ふ地抱あり嘘か真か諸芸に堪能なる上珠には文学の道に造詣深く(中略)ツルケネエの自然派小説までも達者に読み幹し」
1909	4	19	3	富岡花柳便	北甘楽富岡	本名は自然主義の小説主人公のようだが容姿はまづい芸妓が現れる。「自然主義」の語	○	芸妓	「花枝と云ふ新妓が現はれたお名前前は大分美人らしく自然主義の小説の主人公にでもありさうだが御願よつて見奉れば細女の命よろしく」
1909	5	26	3	夜の沼田探見記	利根	夜の沼田花柳探見記。二階から女二人が汁粉屋の脇の屋根の猫の交尾を眺める。	○	芸妓	「胸の屋根の上で猫の番ふのを見て居ただ沼田も発達したものなり猫が電灯の下で自然主義を實行するまでに進歩せんとは」
1909	7	4	3	髪斬り美人の理想	高崎	夫を亡くした婦人が悲観して朝髪するも、近所の役人とよまゆ仲に。	○	交際	「夫の事も何時しか忘れ果て、恋風魔風の横溢せる新作もの、自然主義小説に浮身を贅す有縁となり果てたるそ浅聞しく小説の感化は恐ろしき」
1909	8	22	3	神社化して待合	佐波	廃社となった神社にて自然主義に及ぶものなど	○	交際	「空社となり神体其他は勿体気を去りて村野野嬢の絶好遊場として十数名毎夜の如く夜を徹しての馬鹿騒ぎを演じ中には自然主義が取りまもり」
1910	4	7	3	紅裙隊の花見会 二百名か花か	前橋	前橋花柳寄留宿主催の観桜会	△	芸妓	「尚ほ一層の陽気となりて踊る者踊る者花神を驚かす処か世の中の出陣も自然主義者も呀つと感嘆して腰を抜かすに至るべし」
1910	10	22	3	夜の共進会記(二) 夜の開場と恋愛	前橋	夜間の共進会場の暗がりを見守る男女の様子をうかがう記者「自然主義の語(自然主義の發揮されそふな処を探して見よ)。	○	交際	「恋愛なる二字は真面目に解剖すべき程神聖なるものでは無い極端に云へば山野合に近い位なものだをこの唯道考へながら記者は例に依つて会場内を道這いで居た唯道這いでも詮はない今日は一歩最も自然主義の發揮されそふな処を探して見よ」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係				
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例
1911	12	23	3	色魔少年の大賊 小説草紙から	群馬 前橋	学生風の男が情婦と同居。 身元を洗うと、下等飲食店 で遊びまわっていた男。	●	交際	「十五歳の時本県庁の給仕を勤め居たるが恋愛小説或は自然主義の小説を耽読したる結果は俱るべし肉欲上の快楽を覚へ」
1912	3	2	3	渋川の文学芸妓	群馬 群馬	詩から自然主義まで一通り 弁じる芸妓。	●	芸妓	「文学者が用はれたとの話に（中略）新体詩の七五七七調、現代思潮とやら自然主義とやらまで■■■■滔々と弁じ立てる処」

【「出歯亀」用例】

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係				
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	5	18	3	女按摩強姦さる高崎 の出歯亀は何者	高崎	按摩が稼業中に強姦され たと訴える。	△	強姦	「高崎の出歯亀は何者」
1908	6	2	3	渋川の出歯亀 幼女を強姦す	群馬 群馬	強姦事件。	△	強姦	「渋川の出歯亀」「東京に出歯亀なる痴漢現はれて大久保事件を発生さすや此の怪しからぬ風潮が西に東に伝播して忽ちにして全国に無数の出歯亀を出だし」
1908	6	11	3	日野の監禁事件後閉 いづれ劣らぬ強欲の闘	多野	財産横領にからむ監禁事 件。	△	錯綜	「妙齢の頃は近郷近在に聞こえたる莫運女にて当時の出歯亀式若衆連まで（加害者）と聞いては柿毛を揮ひ彼女の噴物になつては生命にかゝはるとまて云ひ合ひたるほどなりしが」
1908	6	15	3	出歯亀式脱逃の始末 夫きなお腹をポンポン	山田	芝居見物で知り合った男 の子を身ごもり、逃走した 男の親の召喚を警察に願 い出る。	△	交際	「出歯亀式脱逃の始末」「実父を召喚説論ありたりと願ひ出たりこの願出に接したる大物巡査もこれに桶く閉口し犬の交尾にだにも警察官が引出さるゝ、世の中でも出歯亀式脱逃病の療治までは手がとゞまらぬ」
1908	6	16	3	遺恨から放火す 八十 いぢりをして大紛擾	勢多	痴情のもつれと小作関係を を背景にした嫌がらせか ら、放火へ発展した事件。	△	錯綜	「八十四の出歯亀婆さん」「八十の上を越した婆さんでありながら出歯亀以上の好色家にて村の誰彼老若にかゝ、はらす男といふ男と盛んに出歯亀りだし」
1908	6	16	3	赤北花柳便り	沼田	新たに現れた赤禁にはや くも目をつける客たち。	△	芸妓	「赤禁の子の無邪なところが愛苦しいと早くも狙ひを付けた出歯亀が河川向ふに居るさうな怖ろしやのへ」
1908	6	21	3	美人の行倒れ 出歯亀 男運去る	高崎	駆け落ちのつもりが騙され れて金品を巻き上げられ た行き倒れの女性。同情を 寄せた男性と姿を消す。	△○	錯綜	「出歯亀男運去る」「気の毒と同情を寄する出歯亀式の男多く飯塚（ママ）などを持ち来りて身へたたる者等もあり行旅病人として市役所の厄介にもならず難て自然主義の信者らしき男が来りて何処へか連れ去りしと云ふ」
1908	6	26	3	半公と浅草芸妓（其の 上）	群馬 前橋	不釣り合いな女と同居す る男。浅草の芸妓をだまし て連れ去ったと判明。	△	交際	「野口男三郎を頼りに出歯亀を加味して兼研して兼研しておるしもうやうの男なれば顔じ様口伝ありて後家殿の信任は少しも薄がす」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係					
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例	
1908	6	29	3	赤北花柳だより	利根	沼田	一人歩きの中で、最中に男に襲われかける? 芸妓	△	強姦	「とん子と云ふ沼田式の締腰官が過ぎる夜の十時頃痴りによほへお馬出しは神明様の傍にさしかゝると闇からにょつたり出歯亀式の男が立現はれ既んでの事に大久保事件の二の舞を演じる所だつたが」
1908	7	10	3	七十二歳の出歯亀 裁縫志願の女中を殺す	(県外)	一	裁縫学校へ通うために奉公にきた女中を強姦。	△	強姦	「七十二歳の出歯亀」元司法省の属官を勤めた身なるが持て生れた出歯亀性は此年になつても直らず」
1908	7	14	3	高崎花柳便	高崎	高崎	自然主義が流行したためか? 新妓が増加。	○△	芸妓	「近來自然主義が流行して出歯党が多くつた原因かは知らねと当地花柳の如きは雨後の筍の如く新妓が続出し」
1908	7	29	3	駿斗買の恋	勢多	南橋	縁きをことごとく女につまき買ひ返す買ひの男が村娘と意気投合。	○△	交際	「この男自然主義にかけては元相出歯亀をも凌ぐほど、て日々儲けた金は悉く女に大掛け」
1908	7	31	3	旗元芸者の廃業 願ぎ派出所前は野次馬の山		前橋	旗本の娘。芸妓稼業にて売春まがいの事や各への酌が嫌になり、逃走・自由廃業を図る。	○△	芸妓	「荷くも旗元のお嬢様ともあらうものが自然主義の亡者や出歯亀の子分に酒酌をし袖袂のフツも引かせることは残念千万」
1908	8	4	3	高崎花柳便		高崎	寄留宿の転宅。	△	芸妓	「吾嬢の裏の新築二階家へ近々転宅し更に出歯党員數名を抱へるさうだ」
1908	8	6	3	勳八等の出歯亀 勇婦に翠丸を締めらる		前橋	日露戦争で勳八等に叙せられた男が同戦争で寡婦になつた女性の家へ深夜に侵入。女性の反撃にあひ捕まる。	△	強姦	「勳八等の出歯亀」〔女〕は寡婦を立て(中略)(男は)大に同情を表し種々慰めて立ち去りたりたるが寢は出歯亀的敵本主義の親切にて昼間よく家内の様子を兎極め置きて前記の如く深更忍び入り(中略)見事出歯入り損ねた」
1908	8	6	3	自然主義の女神 現はる大妻と相助の水泳き		前橋	芸妓が夜中の散歩中に水浴び。	○△	芸妓	「我れを忘れて眺め居たる一同も漸く無我の境より出歯式の人聞に帰り出歯の姿が清心丹の商標に似て居るの(中略)怪しからぬ品評をなし」
1908	9	23	3	二人出歯の裁判言渡し 何れも有罪で煙火入り	利根	沼田	男二人による強姦事件。	△	強姦	「二人出歯の裁判言渡し」
1908	9	27	3	出歯客の乱暴		前橋	酌婦がいに応じないと暴れる客。	△	酌婦	「出歯客の乱暴」〔飲食店(某)方へ押上り酌婦(某)を捉へて出歯らんとしたるも同人が承諾せぬとて乱暴を始め」
1908	9	30	3	老婆を強姦す 一之宮町の出歯	北甘楽	小幡	民家へ忍び込み老婆を強姦。記事欠損。	△	強姦	「一之宮町の出歯」
1908	10	10	3	自然主義の教師(四) 卒業女生を墮落せしむ	(県内)	一	元教え子の卒業生に手を出す教師。	○△	交際	「清浄無垢なる処女の貞操を弄びて一たび魔道に引入れしのみならず其の身を固めたる後に於ても尚ほ姦通を強ひんとす出歯亀の色情狂の徒と雖も誰も敢てせざるは教育家の片書を有する身分にして平然之れを行はんとす」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係				
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	10	11	3	三ヶ町あひひ〜傘	前橋	当世出歯式表情術で相当の売上げをあげている芸妓が芝居を見物。	△	芸妓	「客の膝へ半身を待たせ秋波流麗に思ひ内にあれば色気が外にほのめいて障らば落ちんと云ふべき当世出歯式表情術(中略)裊名を出歯花」「柳座の大人へ押かけ(中略)遠山男爵が看護婦の載入り然たる竹川男爵夫人を無理に宿泊せしめ書生を遊び出したる留守にて強姦せんとする出歯劇を立見し」
1908	10	11	3	三ヶ町あひひ〜傘	前橋	美人の新妓が現われ前橋花柳界に動揺がはしる	△	芸妓	「此妓が三ヶ町通りへ細腰軽く運歩を移す時は百名に余る白女式幽霊式南瓜式の連中は色を失ひ出歯連杯が見る時は物怪の付きたる様にならぬ」と云ふ頗る物騒(近の)と云ふか」
1908	10	13	3	高崎花柳便り	高崎	柳川町付近の出歯だった客が停車場付近へ河岸を窺えなため下見番が墮落している	△	芸妓	「近來柳川町方面の出歯党は停車場附近の(旅籠)あたりへ川岸を窺へ蓋むにに出歯主義を鼓吹して居るが其の結果として比較的品格を保つて居た下見番の連中で大分墮落して来たとか」
1908	10	13	3	赤北花柳だより	沼田	出先にて宿泊(売春?)していた芸妓の検査	△	臨検	「一助とやら言ふ出歯党の大姐さんは手練手管の四十八手裏表を尽して稼ぎ廻る」
1908	10	16	3	外人の家に出演男 雇下婢の情夫と判明す	前橋	情婦の住み込み先へ忍び逢瀬をするも、主人に発見され辱入者がいと通報される。	△	交際	「外人の家に出演男」
1908	10	24	3	老婆強姦の公判 半より傍聴を禁止さる	小幡	老婆強姦事件の公判。途中から傍聴禁止に。	—		
1908	11	2	3	三ヶ町時雨傘	前橋	芸妓刺殺事件の参考人として召喚された芸妓と、傍聴人の係り。	△	芸妓	「公判を傍聴に来る語弊や泥棒の縁辺の者のみ何れ一癖も二癖もある面魂の中へ当世出歯電をとして後に權ワカたらしむべき美人」
1908	11	3	3	高崎花柳便り	高崎	客と上京したきり帰らない芸妓。	△	芸妓	「てる子は出演客と此程上京した切實となつたとやらで」
1908	11	7	3	高崎花柳便り	高崎	他の客との関係を書いた記事を実に受けせめる客にたいてい突つばねる芸妓。	△	芸妓	「或る人と関係のある様に新聞に出たところが嘘か事実か調べもせずに那處出歯芸者は敢うお断りだ今日限り絶縁すると云ふ云ふではありませんか」
1908	12	16	5	高崎花柳便り	高崎	近來「帯客と出演芸者」とが「増加」し、各の取り合いが激化。	△	芸妓	「近來は帯客と出演芸者が増加した結果花柳界には客の奪略競争が始まつて故に意久氣(ママ)のない手腕のない連中は忽ち客を横取りされるとの語である」
1908	12	18	5	細ヶ澤の出歯電 少女強姦されんとす	前橋	女子師範学校付属小学校の女生徒連れ去り事件。	△	強姦	「細ヶ澤の出歯電」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係					
年	月	日	面	件名	郡	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	12	19	5	細ヶ澤の出歯亀に付て女師附属校の申込み		前橋	女生徒連れ去り事件に對して、脅迫的言動はなかつたととして犯人の情状を願出。	△	強姦	「細ヶ澤の出歯亀に付て」「昨紙掲載の市内細ヶ澤町出歯亀事件に付女子師範学校附属小学校より左の通り申来りたり」
1908	12	22	5	当世出歯亀の拘留 附属の女生徒愛護事件		前橋	犯人拘留。	△	強姦	「当世出歯亀の拘留」「留守宅へ抱へ行きて之を語りたるものにて出歯亀にあらざる旨申立て」
1908	12	27	5	木魚三人女	佐波	東	村婦に手を出した男が結婚するも、妊娠した村婦三人に後始末を迫られる。	△○	錯綜	「好男子を氣取つて仕舞ひ出歯堂の本領を充分に發揮せざるべからずと茲に於てか所謂色飯鬼と變じ猛烈に自然主義の美行を試み居たる処」
1908	12	27	5	二人出歯亀	山田	桐生	注文した酒を持ってきたた二人に店を断られる。(大店すぐ)。	△	酌婦	「二人出歯亀」
1909	1	21	3	三ヶ町便り		前橋	旅一座の俳優に入れあげられ、持合せがなく俳優と料理店にあげられず悔しかる。	△	俳優	「小奴は脚か出歯式なる二枚の前歯を剥出して巖には柳通太夫一座の太料を罵り此度は柳座に開演中なる西野一座の永井と云ふ馬の脚を咬へたる」
1909	1	24	5	軍服を着けし出歯亀 酔に乗じて此くの始末		前橋	軍服姿で女湯そのぞく男。郊外の飲食店で遊興し泥酔した結果カ。	△	のぞき	「軍服を着けし出歯亀」
1909	2	13	3	沼田花柳便り	利根	沼田	客を他の芸妓ととりあう芸妓。	△	芸妓	「竹治とか云ふお出花堂の袖領は一時「寄留宿」の〇々芸者榮子と柳町の米田谷さんを引張合つて「寄留宿」の〇々芸者を喰つたことがある」
1909	3	3	3	露国人の出歯男 お付を喰つて泣く		前橋	豪遊し、金員を渡し酌婦に排みかかると拒否。ふてくされ暴れる。露国人客。	△	酌婦	「露国人の出歯男」
1909	3	6	3	猫が鼠に噛まる	佐波	伊勢崎	泥酔して寝ている芸妓を鼠がかじる。	△	芸妓	「此体を天井の筋穴から覗きたる出歯鼠等も道がに可笑とや思ひけんチユ一畜生奴と反対の畜生呼ば、りをしたるか何うか」
1909	3	20	3	出歯亀三人男 見たり 舞たり突たり		前橋	柳座の便所を覗き痴漢をはたらく男3人。	△	のぞき	「出歯亀三人男」
1909	3	21	3	出歯亀三人男の蔽戒 性根を入れかへて真人間となれ		前橋	柳座の覗き痴漢事件誌報。蔽戒のうえ放免。	△	のぞき	「出歯亀三人男の蔽戒」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係					
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例	
1909	4	12	3	赤石花柳便り	利根	沼田	ルビは「ぬまた」「赤北」の誤りか。女將の仕込のおかけか、大入りした客の扱いにより人気を醸成(箱半)。	△	芸妓	「年に似合わない待遇がお上手になり剩へ鬼に金棒の出歯性が土地向となつて売れる事つたら景品付の福達磨みたようだ」
1909	4	21	3	輪姦犯人の就縛 押つて候事送り	勢多	南橋	輪姦事件。	—	—	—
1909	4	22	3	高陽の御神燈裡		高崎	芸よりも色艶が揃えつたとの旨の対し、客の質の低下を示唆。	△	芸妓	「芸妓と料理店にも革新を促すと同時に遊ぶ客からも出歯風を放れればならぬ」
1909	5	1	3	高陽御神燈裡		高崎	芸妓あづまを落着したの野古藤ヶ原の天狗の使いい？有軒芸妓のほとんをとを落とす。	△	芸妓	「此の御使者なかへへの出歯屋で主人の天狗様を利用して時々有軒芸妓に一種の催眠術を施し殆んど其大半を撫で倒したと云ふ」
1909	5	28	3	芸妓のおつこち	佐波	伊勢崎	呑龍の縁日に行き会つた芸妓は素見連を連れて用水堀に落ちる。	△	芸妓	「呑龍様の前へ差寛るや縁日のこと、て近郷近在より集合せる准出歯連多く勝手次第の月日を言ふより衆助グツと聲に聴り群集を叩分けて突進を試みた勇氣に流石の出歯兒も運易(ママ)して道を開いたが」
1909	6	12	3	輪姦事件の公判 傍聴禁止となる	勢多	南橋	輪姦事件の公判が風俗墮落の恐れありと公判(傍聴)禁止となる。	—	—	—
1909	6	15	3	輪姦事件の判決 は夫々軽重あり	勢多	南橋	輪姦事件の公判結果。本日傍聴者が詰めかける。	—	—	—
1909	6	20	3	輪姦犯人の控訴	勢多	南橋	輪姦事件の判決を不服として控訴。	—	—	—
1909	6	29	3	高崎魔箱の打撃	群馬 碓氷	高崎 倉賀野 板鼻	高崎での飲食店取締強化により値段交渉、相手酌婦の確認が不可能になり客が激減。高崎の客が倉賀野(酌婦多、値段安)、板鼻へ。みずばらしい客に対し、受領した金額分の酒肴のみで一切相手にしない酌婦。	△	酌婦	「人間の出歯心と云ふ奴恰かも飯の蠅を追ふに異ならず此方が駄目なら彼方と云ふ風で一里許り離れた倉賀野へとしへ」と出掛ける」
1909	7	9	3	振られて告訴す		高崎	酌婦の態度に怒る客。	△	酌婦	「此男は(某)と云ふ出歯亀なりしと」
1909	7	30	3	勵志村の強姦 者は局部に負傷 者は警察で益死	佐波	勵志	祭見物帰りの女性が強姦される。	—	—	—

基礎情報			記事内容			「自然主義」用語関係				
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例	
1909	8	4	3	残念 出菌亀の脱狂ふ だと少女を半殺	郡 北甘楽	高田	少女をだましまして五十銭銀貨を出してこと及びほうとするも、抵抗される。	△	強姦	「出菌亀の脱狂ふ。」
1909	8	19	3	柳生町の出菌亀	山田	桐生	亭主の留守中に忍び込み	△	強姦	「桐生町の出菌亀」
1909	9	3	3	芸妓登用試験 高崎署 の新取締方法		高崎	酌婦と競争するが故の芸妓の登用の低下を指摘。芸妓の方法の提案。	△	芸妓	「白首と神秘的活動の競争を演ずる始末となり花柳界の墮落せる事甚だしく柳川町方面よりは寧ろ此方面に出菌亀の本城を構ふるもの類々たり」「籌主義の出菌亀連に取てはチト恐慌を及ぼすならん」
1909	9	6	3	出菌料理店臨検 とお客の大猿須	芸妓	高崎	売春の真跡発見。(客は逃走)。見苦しきさま(売春?)にて説諭。軀体ながら問題なし。などとの臨検結果	△	臨検	「出菌料理店臨検」「出菌の本城〔料理店〕事柳川町の〔店主〕方へ突如として臨検したるに寝耳に水の芸妓どもは青くなり恰かも蜘蛛の子を散らす如くに逃走したる」
1909	9	15	3	悲劇暗闘の一幕 中落花猿藉の体	密林	世良田	所用の途中の下女を襲う男。	一		「二度返も獸欲を満たしたる件の男」
1909	9	28	3	強姦婦人の公判 亀大いに陳弁す	新田	高田	強姦傷害事件の公判。	△	強姦	「出菌亀大いに陳弁す」
1909	9	29	3	強姦婦人の弁論 の求問尚ほ不服也	北甘楽	高田	強姦傷害事件の公判。	一		
1909	10	14	3	女将劇場で気絶		高崎	料理店女将が演劇見物。便所にて覗き騒動(勘遣いカ)。	△	のぞき	「ソレ出菌亀取逃がすなと蜘蛛の子を散らすが如く駭廻りて捜索したるも出菌の潜みたる如き形跡更らになく」
1909	11	13	3	少女嫁に譴ふ 部に負傷す	少女局	高崎	飲食店店主が酌婦に売春を強いる。	△	酌婦	「乙女娘の〔酌婦〕は出菌亀流に通用せざる為め〔客〕は〔女将〕に話したれば〔女将〕及び〔店主〕は上客を逃がしては此の不景気に立つ漸がなしいと婉言を〔酌婦〕に驕り有めつ騙しつ漸く納得せしめ〔客〕の意に従がはしめたるが其翌日より〔酌婦〕は局部が痒い痛いと言ひ」
1909	11	18	3	賄賂の怨みが強姦 円と詫状一札の事	群馬	岩鼻	雇人仲間の女性に好意をよせざるも相手にされず。強姦。	一		「土蔵の軒下に連れ行き引倒して遂に獸欲を遂げたり」
1909	11	20	3	珍類の告訴 損ねてむしる	碓氷	某村	村長が住込みの看護婦部屋に忍び込み強姦しようとするも、抵抗され未遂におわる。	△	強姦	「出菌り損ねてむしる」「近來泥棒村長と云ひ出菌村長と云ひ物騒な村長殿の出来ることかな」

基礎情報			記事内容			「自然主義」用語関係			
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例
1909	12	23	3	美人の不法監禁 含める萩の枝 や野猪に騒ぐる	郡 前橋	妻女としていれた女性を 監禁し手籠めにする。	—		「妻女として人憎せる〔男〕のために肉欲の犠牲となりて 屋外へは一步も踏出す能はず」
1909	12	24	3	美人強姦未遂 を破れんとす	勢多	町はずれにて強姦未遂事 件。	—		「暴力を以て既に強姦を逞しうせんとしたる」
1910	1	13	3	九歳の少女を姦す 部からは鮮血淋漓	吾妻	農学校の馬をみせてやる とどなまし少女を連れ出し 強姦。	—		
1910	1	17	3	水道部の強姦騒 ぎに恋する二人の男	碓氷	恋敵を陥れようと娘の父 を巻き込み強姦の告訴を 目論む男。	—		
1910	1	21	3	愈々強姦の告訴 検事局へ出頭す	碓氷	強姦騒動の娘が検事局へ 出頭。	—		
1910	1	22	3	一の草の劇強姦 にも恥ぢぬ佛々爺	北甘葉	庚申堂裏にて風呂敷包み を強奪、強姦未遂を起こ す。	—		「すんでの事に強姦を逞げんとしたるが」
1910	1	22	3	馬の脚の逃亡	前橋	源劇俳優が宿の仲介で芸 妓を買い物にする。	△	俳優	「男地獄西野黨一座の出歯俳優小柳と云ふは」
1910	2	10	3	幼女強姦の公判 傍聴禁止となる	吾妻	幼女強姦の公判が風俗墮 乱の恐れありとして傍聴 禁止となる	—		「路上に遊び居たる〔幼女〕を見て妙な考を起し〔中略〕裏 手の森林中に背負ひ行き強姦を逞うせんとしたるも」
1910	3	10	3	唾者の強姦公判 唾者の身振手振	新田	強姦強姦事件の公判。	—		
1910	3	12	3	唾者の強姦は免訴 は眞平御免々々	新田	被害者の告訴がないとし て強姦については免訴	—		
1910	3	23	3	共同便所に籠城 停車場の出歯亀	高崎	覗きの常習犯が高崎先停 車場の便所にも入り覗き を行う。	△	のぞき	「高崎停車場の出歯亀」「此の男中々の好者湯屋覗き便所覗 きの名人にて遂には一般の人より出歯男として知らるゝ に至れり」
1910	4	7	3	紅裙隊の花見会 二百名か花か	前橋	前橋花柳寄留宿主催の観 覧会	△○	芸妓	「尚ほ一團の陽気となりて踊る者跳る者花神を驚かす如か 世の中の出歯も自然主義者も呀つと感嘆して腰を抜かす に至るべし」
1910	4	8	3	妻腰女強姦さる は箕輪の新平民	群馬	妻腰み帰りの女が強姦さ れる	—		
1910	5	15	3	別れた女房を強姦 喜罪にて処刑さる	新田	離縁の話し合い中の妻を 強姦しようとし、抵抗され 怪我を負わされる。	—		

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係	
年	月	日	郡	地域	特記事項	有無
1910	5	19	勢多	芳賀	強姦事件の公判。	—
1910	5	22	利根	沼田	使いであるとして偽称して披摩を墓地へ連れ込み強姦。	「思ふが儘に獣欲を遂げたり」
1910	5	23		前橋	暗がりから現れた米国人人?が芸妓のてを握ったり、キスをすする事案が発生。	「之れが舶来の亀さんだろう」
1910	5	25	群馬	倉田	山菜とりに行った女二人が男に襲われる、強姦殺人未遂事件。	「思ふがまゝに獣欲を遂げられ」
1910	5	27	佐波	芝根	隣家の娘が庭先で入浴する姿をみて愛な気を起こす。	—
1910	6	21	群馬	倉田	山菜とり中の強姦殺人未遂事件公判。	—
1910	6	25		高崎	口入依頼をした女を自宅に引き止め強姦しようとする。	—
1910	6	28		高崎	横顔の余罪も発覚。	—
1910	7	10	佐波	伊勢崎	伊勢崎の人氣芸妓。	△ 芸妓 「生れ付ての藪尻みが出亀主義(ママ)の御意にめし彼れが一瞥には云ふに云はれぬ趣あるとて此の不景氣に御全盛とは妙なものなり」
1910	7	17		高崎	隣家に押し入り入りその家の妻を強姦。	「其保獣欲を遂げて」
1910	9	2	利根	(桐ヶ窪峠)	逃走中の強姦犯が捕まる。	—

【「出處る」(動詞形)用例】

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係	
年	月	日	郡	地域	特記事項	有無
1908	6	16	勢多	芳賀	痴情のもつれと小作関係を背景にした嫌がらせから、放火へ発展した事件。	△ 錯綜 「八十四の出亀亀婆さん」[八十の上を越した婆さんでありながら出亀亀以上の好色家にて村の誰彼老若にか、はらず男といふふ男と盛んに出亀り散らし]

基礎情報			記事内容			「自然主義」用語関係			
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	6	19	3	磯部鮎泉へ雲隠れやつ子と氣業の浮気沙汰	高崎	2軒目の料理店に新たに呼んだ芸妓の目を盗み、磯部へ旅行する芸妓と客、磯部の旅館にて発見。	△	芸妓	「椎光郡は磯部鮎泉〔旅館〕の一室に出歯つて居るニタ組の男女こそ正しく前後姿を隠した連中と知れた」
1908	6	20	3	木質宿にアハヤ血の雨自然主義を実行する女	前橋	梅毒から失明し放浪した男が、前橋の木質宿にて売春を行う女と夫婦気取りに。女が他の男を連れ込み刃傷沙汰に。	○△	娼婦	「(男は)十五歳の頃より女の跡尻を追ひ盛んに出歯つたる天罰罰面十八歳の春激烈なる梅毒を患へて」
1908	6	21	3	滑稽情夫の身代り流石の蓮葉女甘々騙さる	利根	旅回りの俳優に惚れた女が、その俳優を騙る男にだまされて夫がありながら情婦になる。	△	俳優	「日頃の思ひを達したれば病氣保養をかこつけに幾日かを秀太と出歯つたる末生木鞠かる、思ひにて家へ戻りて」
1908	7	7	3	赤北花柳だより	沼田	約束した御祝儀が少ないとして客と喧嘩をする芸妓。	△	芸妓	「青柳の糸其儘の小光組さんはツイ二三日前の十二時頃舞台横丁の〔料理店カ〕で出歯つたまではよかつたがお約束の御祝儀が少ないとかなんとかで欲が手伝ふ痴話狂ひの果て往來に飛び出して立廻りを演じ」
1908	7	9	3	高崎花柳便り	高崎	料理店へ客と出掛ける芸妓。	△	芸妓	「小奴と云へばこの妓は此間をさるお客様と〔料理店〕で出歯つた上更に八島町の〔旅館〕で明け易き夜を根んださうな」
1908	7	18	3	高崎花柳便	高崎	「出歯る」芸妓のはなし	△	芸妓	「近來出歯る芸者が多くなつた結果〔旅館〕〔旅館〕〔旅館〕〔旅館〕〔旅館〕等へ出歯つりに出掛ける者益々増加し同時に同腹まで出張つて来たのも二三妓あるやうだ」
1908	7	19	3	出歯り強盗の失敗 書記強盗の身代りとなる	高崎	柳川町の酌婦病院へ入つた強盗が変な氣を起すつも梅毒治療院であると言き断念。逃走するも、飲食店事業所書記があやまつて捕縛される。	△	強盗	「出歯り強盗の失敗」〔乾張(ママ)の中を覗き見れば昔年若き女のみなるより急に氣が變り強迫の上出歯り呉れんと其一人をゆり起し出歯らんんとせしに酌婦もハツツ驚きしも心を定め静かに強盗に向ひ」
1908	7	27	3	出歯り女房の行衛 血眼になつて捜索中	沼田	養蚕出稼ぎ中に情夫をつくる女	△	娼婦	「出歯り女房の行衛」〔養蚕出稼中他に情夫を拵らへ(夫)の目を忍び居りては諸処にて出歯り居り様子」
1908	7	28	3	美人輪姦さる 加害者二人は被事送り	利根 群馬	飲食店にて工女に声をかけた男が、後をつけ回す。飲食店に素人女を引つ張り込む。	○△	強盗	「飲食店に酒食し居りて之れを認め自然主義の本領を發揮して高徳休んで行くと呼聲め無理無体引入れられて此辺る穢いだらよからうと戯れ果は隙を窺つて出歯らんとして氣色見えたるより両女は薄氣味悪く思ひて同寮を逃出し」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係				
年	月	日	面	件名	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	7	29	3	児腰座俳優の不品行 女中や寡婦を引ッ懸る	高崎	高崎で公演中の見舞座の俳優が近隣の女中、寡婦となれ合い、その不品行が問題に。	○	俳優	「同座附近に悪意となりし者多く之れが為め自然主義の寡婦や旅人宿の女中連が俳優連の口車に乗せられて出齒るもの多く」
1908	7	31	3	孕み女中	前橋	客と関係して料理店を追い出された女中が、新たな勤め先にてても芸妓から客を取らんとす。妊娠費用を客からとす。	○	錯綜	「紺屋町の〔料理店〕に住み込み居り自然主義の随一出齒屋の旗頭同家の宿六と乳繰り合つて主婦に追出され」
1908	8	1	3	高崎花柳便り	高崎	新妓が盛んに出齒るため、老妓は苦戦。	△	芸妓	「今月一本になつたばかりの(中略)などが盛んに出齒るので老妓連は勢力を失ひ舌を巻いて引込んで居るとか」
1908	8	1	3	書く丈でも熱くなる	多野	懐胎していることをゴブマ化し他の飲食店へ住替えさせると。	△	酌婦	「(男)は三十円の証文を捲く約束で出齒りながら五十円を懐中にして立帰りしより」
1908	8	4	3	高崎花柳便	高崎	田舎から高崎に来て遊び芸妓に惚れられたと惚気する客。	△	芸妓	「〔寄留宿〕の奉助、〔寄留宿〕の田の字などを出齒り村へ帰つて已れハア高崎ちう町で豪い阿魔ツ子に惚れられて困つた」
1908	8	6	3	勲八等の出齒亀 勇婦に薬丸を締めらる	前橋	日露戦争で勲八等に惚せられた男が同戦争で軍婦になつた女性の家へ深夜に侵入。女性の反撃にあい捕まる。	△	強姦	「勲八等の出齒亀」「〔女〕は寡婦を立て(中略)(男)は大に同情を表し種々慰めて立ち去りたりたるが実は出齒亀的敵本主義の親切にて昼間よく家内の様子を見極め置きて前記の如く深更忍び入り(中略)見事出齒り損ねた」
1908	9	9	3	呑気のお眼玉	山田	芸名そのままの「呑気」な芸妓が刑事の臨検にかかると。	△	臨検	「去る六日の夜は出齒り屋のお客を〔料理店〕から〔旅館兼料理店〕に咬え込みし処を桐生署の風俗係に取押へられ」
1908	9	10	3	振つた出齒り裁判 面白き立会検事の論告	山田	懲罰目的の家宅侵入事件の裁判。	△	強姦	「振つた出齒り裁判」
1908	9	12	3	三ヶ町あひへ傘	前橋	住み替えを計画中の芸妓。	△	芸妓	「幸治は何の因果で袍着まで免れぬ事やら鼻の頭が武州松山庄の百穴宜しくなので(中略)齒の浮く様な作り声には大体な出齒り客も怖気を振つて二度と再び聴ふ者なく」
1908	9	14	3	高崎花柳便り	高崎	芸妓を落とそうと計画中の男あり。	△	芸妓	「おはんを出齒らんと昨今〔料理店〕あたりで盛んに陥落策を廻らして居る優男がある」
1908	9	14	3	赤石花柳便り	佐波	金キセルで有名な芸妓の動向。	△	芸妓	「菊龍は一昨日の一番列車時間に停車場へ出齒り折柄下車して来た田紳と車を連ねて前町の〔料理店〕へ乗り込み」
1908	9	14	3	沼田花柳一口便	沼田	客と出齒るとの芸妓の噂。	△	芸妓	「お染は本町の久太君と出齒るとの噂が高い」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係					
年	月	日	面	件名	郡	地域	特記事項	有無	分類	用例
1908	9	15	3	姦通料三千円の貸金請求証書に捺を引く	群馬	上郊	不貞行為が発覚し慰謝料をふっかけられるも、村民の仲裁にて解決。	△	錯綜	「生米の出菌り屋にてこれまで度々女に手を出しては失敗し」「徐々興の手を出して味な関係をつけ村人の目を忍んで出菌って居る」
1908	9	27	3	出菌客の乱暴		前橋	酌婦がいに応じないと暴れる客。	△	酌婦	「出菌客の乱暴」「飲食店〔某〕方へ押やり酌婦〔某〕を捉へて出菌らんとしたるも同人が承諾せぬとて乱暴を始め」
1908	10	5	3	飛んだ家政学会員、酌婦と共に宿屋へ泊る		高崎	料理店にて芸妓数名と遊興、芸妓を連れ飲食店へ。料金の不足分支払のため、酌婦をお供に店をたぬ。酌婦と共に宿に宿出。	△	臨検	「同夜宿錢とも金一円を貰ふ約束にて出菌らせたる旨自白したれば拘留五日」
1908	10	8	3	振られた口惜しさに		前橋	酌婦を連れ出そうとするも断られたため、所持金紛失と偽り警察へ訴える。	△	酌婦	「酌婦〔某〕を捉へて出菌らんとしたるも同人が承諾せざりしため余儀なく飲食代金一円六十三銭を支払ひて立出で」
1908	10	9	3	人の娘を連れ込む		前橋	妻子のある男が娘を口説き宿へしげこむも、娘の親が帰宅の遅さに捜索。	△	錯綜	「旅人宿〔某〕方へ連込み宿帳へは（中略）と記入して大に出菌らんとしたる」
1908	10	11	3	三ヶ町あひひ傘		前橋	西野一座の俳優が飲食店で芸妓と遊ぶ。	△	俳優	「西野一座の馬の脚長井小柳水野などの連中は一端網にさられて表へ出されぬ苦しさに真昼中横山町（飲食店）方へ出菌つて不見転連と巫山戯散らして居る」
1908	10	27	3	高崎花柳便り		高崎	懇意の旅俳優の出立を嘆く芸妓。	△	俳優	「紅葉は先頃藤守座へ来た金六一一座の福之助と出菌り合ひ福之助が出奔に際しては旅館の〔某〕へ行つて別れが辛い」と泣いたとやうだ」
1908	11	1	3	芸妓を迫す痴漢、税務署と同じ席にて	佐波	伊勢崎	隣座敷から帰る芸妓を呼びとめしげこく迫る。	△	芸妓	「若吉を呼び留めて坐敷へ引入れ酒を肴めて出菌らんとしたれと諦と知つて若吉中々に応ぜず」
1908	11	3	3	葉書で女中を出菌る		高崎	女中を妻とすると約束し、男の同親死の葉書を女中に投函させるも姿を消す男。	△	交際	「葉書で女中を出菌る」
1908	12	12	5	酌婦に振られて乱暴		高崎	酌婦を口説くが断られて乱暴。無理やり出菌らうとする。	△	酌婦	「果は逃げ廻る」「酌婦」を追いかけ有無を云はせせず出菌らんとせしも「酌婦」が応ぜざるより」
1908	12	13	5	馬脚志願の馬鹿者	群馬	室田	嘘をついて芸妓をただまにのり俳優に入門した男。	△	俳優	「奉公中人に誘はれ新橋辺の安芸者を出菌りしところから独天狗になり」
1909	3	2	3	脅迫されて娘の逃走、出菌らるゝが厭さに	(県外)	—	栃木県足利。言い寄られ、手籠めにされたたこをとを苦に逃げ出す娘。	△	交際	「出菌らるゝが厭さに」

基礎情報			記事内容		「自然主義」用語関係					
年	月	日	面	件名	郡	地域	特記事項	有無	分類	用例
1909	3	2	3	高崎花柳便り		高崎	隣座敷の様子を客に報告し笑う芸妓も身請けされること。	△	芸妓	「萬子は此間迄隣座敷で出齒の客等を見て来てお座敷へ来て其模様を客に報告し色気放きのあははは、と笑はせて居たが」
1909	7	1	3	三ヶ町五月雨傘		前橋	芸妓、茶見客のあつまる飲食店の客の芸妓評。	△	芸妓	「茶見連の体面所兼お茶換芸妓の出齒り所なる〔飲食店〕に集りし地廻り男の噂に依れば」
1909	11	20	3	珍無類の告訴 損ねてむしる	碓氷	果村	村長が住込みの看護婦部屋に忍び込み強姦しようとするも、抵抗され未遂に終わる。	△	強姦	「出齒り損ねてむしる」「近來泥棒村長と云ひ出齒村長と云ひ物騒な村長殿の出て来ることかな」
1909	11	26	3	三ヶ町附込帳		前橋	解散した西野一庵の元俳優が昔馴染みの芸妓を脅迫し金銭を強奪する。	△	俳優	「座中の小柳と云ふ馬の脚は（中略）例の横山町〔飲食店〕方へ出齒りて以前関係ありし即ち芸妓を脅迫し」